常夜の月

月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
常夜の月

【Ｎコード】
Ｎ０３８６Ｏ

【作者名】
月夜

【あらすじ】
木の葉崩しの後。
ヒナタは、幼い頃から抱え続けた苦しみを受け入れ、彼女なりの方法で立ち向かう。

実際の、木の葉崩し後の、諸々の面々の諸事情及び行動をムシしていただけるとありがたいです。
ヒナタの芯の強さを書いてみたかったのです。オンナノコもがんばっているんだよ・・・ということで、生暖かい目で見守っていただ

けると幸いです。

修行1日目～3日目

進む道の、なんと長いこと。
振り返る道の、なんと短いこと。
あんなに暗く重いと感じた道も、振り返ってみればあっという間だったことに気づく。
そして、これから進む先にあるものは、漆黒の闇――――――。
道などなく、そこにあるのは・・・多分、崖なのだ。

木の葉崩しを防いだものの、里の負った傷は深く、火影をはじめ多くの優秀な忍を失った。彼らの穴を埋める人材をなんとしてでも補充しなければならない。一度防いだとはいえ、いつ奇襲をかけられるかわからない。友好条約の脆いこと、他の里に比べ自分たちがいかに安穏と暮らしていたかを、嫌でも思い知らされたのだ。

しかし補充といっても、アカデミーの生徒をいきなり下忍へ昇格させるわけにもいかず、結局、人数の補充ではなく、個人の能力をあげることにより補強することになった。上忍、中忍は経験も長く、人に教えを請うより独自に鍛錬を重ねるほうが能率が高い。また、五代目火影の補佐や国境の警備、里の修復や他国の情報収集など彼らに与えられた任務は多く、激務と化していた。

そこで重役たちは下忍の能力を上げることに重点を置いた。幸いにも現在の下忍は近年稀にみる逸材揃い。中忍試験において彼らの見せた能力はすばらしく、中忍としてすぐにでも任務に就けるものも少なくない。

よって里の一角にある山小屋に彼らは集められ、3ヶ月の修練を積むことになる。

本戦に残ったシカマル、サスケ、ナルト、ネジはわかる。
予選で敗れたとはいえ、ナルトを追い詰めその高い戦闘能力を見

せたキバもわかる。
だが・・・ヒナタは？

修行1日目。
木の葉の里でも町外れに位置し、滅多に人も寄り付かない山の奥に、こんな小屋があったことを初めて知った。
彼らは多かれ少なかれ知り合いであり、いまさら自己紹介も必要ない。名前はもとより、各々のもつ力まで理解しているのだ。
だからこそ、彼らの困惑した眼差しの意味をヒナタは理解する。
自分自身、ここにいることが場違いなのだと重々承知しているのだ。はじめて言い渡されたとき、無理だと言い、何故かと問うた。下忍くの一を補強したいのなら、サクラやいの、それにテンテンだっているのだ。だがサクラはその頭脳を買われ火影の補佐の一端を担い、いのやテンテンは実践に使える体術や忍術を磨くより、情報活動に必要な知識を得ることに重点を置くという決定が下され、なおも言い募ればただ一言、「任務だ」と。
「任務」、その一言で全てを了承しなければならない。
ヒナタには、静かに頷くこと以外にできることなどなかった。

「なんでヒナタがいるんだよ？」
はじめに口を開いたのはキバだった。同じチームという気安さもあるのだろうし、腹に溜めずに口にする彼の性分でもあるのだろう。キバに悪意はなく、ただ疑問を言葉にしただけなのだ。
だが、悪意がないからといって、投げつけられた方が傷つかないということはない。
「ネジとの試合を見て、見込みがあるって思われたんじゃねーの。」
「あんなもん、本選のを見ればネジが手加減してたってわかるじゃねぇか。」
本人にその意思はないのだろうが、庇うような発言をしてくれた

ナルトに一瞬だけ浮上したヒナタの心は、キバの言った事実でまたもや消沈する。
「ご、ごめんね。私も何かの間違いじゃないかって、聞いてみたんだけど・・・」
俯き、おずおずと話すヒナタの耳に、少年たちの無言のため息が届く。
忍に性格的な向き不向きがあるのだとすれば、それは「明朗快活」「即断即決」などという言葉が与えるようなイメージであろう。自分の力を過小にも過大にも評価せず、言うべきことを言い、やるべき事をやる。自分の命や里の安全を脅かすものに敢然と立ち向かい、戦う。
そこには怯えも恐れも、迷いもない。
だからだろうか。忍であるもの、また忍を志す者は大様にはっきりとした性格を持っている。明るいや暗いの違いはあるだろうが、誰しも明確に自分の意思を伝える。
予選に於いてネジがヒナタに「忍に向いていない」と言ったのはある意味、的を得ているのだと彼らは思う。ナルトでさえ、そう感じてしまうのだ。それほどまでにヒナタの言動、行動は不安定で明確ではない。人の顔色を窺い、自己主張をしない。
彼女の能力が低いだとか高いだとかは関係なく、その性格に少年たちは少なからず苛つきを覚えるのだ。
こんな奴と3ヶ月も共に暮らすのか・・・。
そう、これは強化合宿という名の修行であった。

修行3日目。
「上忍がくるはずじゃなかったのか？」
次なる質問はシカマルだった。
「そう聞いていたが・・・」
ネジが碗の上に箸を置きながら答える。
修行とはいえ今回の目的は各々の体術、忍術の向上である。サバ

イバルではないのだからと小さいながらも屋根のあるところでの寝泊りを許されていた。彼らは自炊し、湯を使い、薄い布団で寝た。

「居ても居なくても俺は別に構わん。好きにさせてもらう。」

そう言い、サスケは汁を啜った。

今夜の食事当番はネジである。ヒナタは何とか役に立てればと炊事をすると言ったのだが、はっきり言ってお嬢様育ちの彼女より、一人暮らし歴の長いネジやサスケ、ナルトの方が遥かに腕が良かった。それならばせめて洗い物でも、と食事の後片付けをかって出たが二日目の昼に、三つ目の湯飲みを割った時点で炊事場から追い出された。掃除ならばと思ったが、もともと物のない家で日中はもとより時には夜まで修行をする彼らが汚すわけもなく、形ばかりの掃除となってしまう。風呂の準備をと動いたときには既に終わっており、何事も後手にまわり役に立てない自分にほとほと嫌気がさしてしまった。

「俺だって勝手にするのがいいけどさ、限界ってもんがあるんじゃねぇのか。」

そう言って茶を飲むキバの手には竹で作った湯飲み。ヒナタが割って足らなくなった湯飲みの替わりに彼が作ったものだ。

「俺もそう思うってばよ。サスケだってカカシ先生に教えてもらわなきゃ千鳥なんて使えなかっただろ？」

「ドベに言われたくない。」

「どーいう意味だってばよ！」

「ふん。役にも立たない口寄せなんか覚えてどうするつもりだ。」

「口寄せが役に立たないって、なんでわかんだ？カカシ先生だって使ってるじゃねーか！」

「犬ならまだしも、カエルなんぞ呼び出して何になる？」

「お前は見てねえからそう言うんだ。よーし、んじゃここでガマ親分を呼び出してやる！」

「ま、待ってナルトくん！」

今にも親指を噛もうとするナルトをヒナタが必死で止める。ガマ

親分なるものをヒナタも見たことがないのだが、こんな小屋の中で呼び出しても果たして大丈夫なのか。いや、それよりもこのままサスケとナルトが言い争うのを黙って見ているわけにもいかない。誰かが止めに入るのかと思っていたが、シカマルは面倒くさそうにネジは興味なさそうに食事を続けているし、キバはどこかおもしろそうに見ているだけだ。キバの隣で肉に噛みついている赤丸は論外だろう。

「カ、カエルでも、えっと・・・ほら、水中での戦いではすっごく頼りになりそうだよ。そ、それに上忍の先生はもしかしたら、えと・・・何か任務が入って遅れているだけかもしれない。ね、もう少し、待ってみようよ。」

「あなたが一番、指導を必要としているのに悠長だな。」

聞いていないと思っていたネジの言葉がヒナタに突き刺さる。

「過大評価をしているつもりはなかったが、体術忍術、ここまで落ちるとは予想外だな。」

「・・・ご、ごめんなさい。」

「俺に謝罪してどうする？そんな暇があれば修行しろ。」

「ヒナタだって、がんばってるってばよ。んなキツイ言い方しなくてもいいじゃねぇか。」

「がんばればいいというものではない。成果がなければ意味がないだろう。」

言い方はともかくネジの言い分はわかる。だが落ちこぼれとして馬鹿にされてきたナルトには、ヒナタであろうと誰であろうと蔑まされているのを見るのが嫌なのだ。

ヒナタがそれを甘んじて受け入れているのは、もっと嫌なのだが。

「ネジの言ってることだって正しいだろ。」

「キバ！お前、同じスリーマンセルの仲間だろ！」

「つってもさ、俺だってシノだって、ヒナタのドジ振りで危ない目に遭ってるしな。この先もまだ、スリーマンセルで任務に就くこともあるだろうし、ヒナタにはもうちっと強くなってもらわなきゃ

困る。」
「・・・ごめんなさい。」
「だー！だから謝んなって！ネジも言ってるだろ！んな暇があれば修行しろ！」
「ご、ごめんなさい！」
「あーもう、めんどくせーな、お前ら。修行なんぞ自分にその気がなきゃ、しても意味ねーだろ。がみがみ言われてやったところで成果があるわけねーじゃん。とにかく上忍はもうちょい待って、んでも来なけりゃめんどくせーが、里に確かめる。んでいいだろ。」
自分の思っていることと違えば何を言っても食って掛かってくるいのや、あたりソフトにそれでも人を丸め込んで自分の思い通りに動かそうとするサクラも面倒だが、何を言われても聞き入れてしまうヒナタも、シカマルにとっては面倒くさい存在だ。
まあこれだけ言われても、一粒の涙も見せないところは助かっているが。

そうしてふと、気づく。

シカマルはヒナタのことをそれほど知っているわけではない。だがこの三日。中忍試験中、アカデミーでのこと。彼女がどのような状態に陥っても決して泣きはしないことに。
長い付き合いだ。いのが泣いているところは幾度も見た。気が強く快活な彼女は意外と涙脆い。サクラが泣いているのも見たことがある。
だが、ヒナタは。
この、いのやサクラより一回り華奢で弱々しい少女は、一度も、涙を見せたことはないのだ。

修行１２日目

修行１２日目。
自然と役割分担が決まってきた。当初持ち回りでしていた食事当番もいつのまにかネジとサスケの間で、後片付けはキバとナルトの間で回り始めた。家事においてシカマルには誰も期待していなかったし、ヒナタは数にも入っていなかった。
そして上忍は、まだ来ない。
さすがに遅すぎるだろうと、シカマルが里に確かめに行った。
「あ、お帰り。シカマルくん」
夕食の手伝いなのか、小屋から歩いて１０分ほどの処に流れている小川で、ヒナタが青菜を洗っていた。
「どうだった？」
「んー、なんつーか。まあ、メシんとき話す」
今話して、また少年たちに話す。二度話すことの面倒さを考えたのだろう。ヒナタはシカマルの面倒くさがりをみて、小さく笑う。
「そう」
こういうところがいいな。
これがいのやサクラだと煩く聞いてきて、シカマルが話すまで許しはしないだろう。
「それ、もう洗えたのか？」
「うん」
ヒナタの返事を聞いて、シカマルは彼女の手から青菜の入った篭を取った。
「あ、いいよ」
慌てて取り戻そうと延ばしたヒナタの手を止める。
「別に構わねーって」
何かときつく言うが、ネジもキバもヒナタのことに関してはかなり気にかけている。９月とはいえ、山の中。篭から伝ってくる水は

冷たい。多分、どうしても手伝うと言い張ったためヒナタが洗っていたのだろうが、一緒に帰ってきたシカマルではなく、この冷たい青菜が入った篭をヒナタが持っていたら、キバには言葉でネジには目で責められ、面倒なことこの上ない事態になるのはわかりきっていた。

結構な量の青菜を落とさないように気をつけながら進む。この小川は生活に欠かせない水場として、本来なら自然と道ができていようが、普段は人の住まない小屋。道も険しいとまでは言えなくてもそれなりに荒れている。張り出した木の根や大小様々な石のせいで、少々歩きづらいのだ。とはいっても忍としての修行を積んでいる彼らには苦にもならない・・・はずだった。

「あっ」

後ろで小さく声がしたかと思い振り返ると、案の定、ヒナタが転んでいた。

そう、苦にならないはずのこの道で、彼女は幾度も転んでいるのだ。

「大丈夫か？」

「う、うん。ごめんね。先行っていいよ」

ああそうですか、と行くわけにもいかない。仕方ないので片手を差し出し、彼女が立ち上がるのを助ける。

ヒナタはよく転ぶ。修行中も、そしてこんな何でもないときも。走っていて転ぶときもあれば、歩いているだけで転ぶこともある。始めは異様に鈍くさいだけかと思ったが、何か違和感があるのだ。

「お前、どっか悪いんじゃないのか？」

「え・・・？」

「んな何でもないとこで、すっころんでるのはさ、足かどっか、悪くしてるんじゃないのか」

「そ、そんなことないよ。・・・私、とろくさいから」

そう言ってヒナタは俯いた。

あまりにもよく転ぶヒナタに異常を感じたのは、何もシカマルが

始めてではない。始めに気づいたのはキバだった。スリーマンセル時にもよく転んでいたが、ここまでひどくはなかったのだ。少なくとも何かがあって、躓き転ぶ。そのくらいの芸当があったものだ。だがいまは、何もなくても転ぶ。

そのことにキバが詰め寄り、ネジの白眼で足を調べたのが修行6日目。

だが何の異常も見えなかったのだ。

「ネジも言っていただろう。医者じゃないから、すべてわかるわけじゃねぇって。本職に診てもらったほうがいいんじゃねぇか」

「・・・ううん、本当に大丈夫なんだよ。これは・・・違うから」

儚く笑ったヒナタの顔に、夕闇の陰が落ちた。

「・・・つまり、里でもそいつがどこにいるのかわからねぇってことなんだな？」

シカマルの報告を、サスケが苛つきながら確かめる。独自に修行を重ねてきているが、ナルトに言われたように限界も感じ始めていた。中忍試験決勝前にカカシと修行を積んだときの、自分でも驚く程の飛躍。それを知ってしまったがために、今の状況が歯痒くもある。

「まあな、任務が入っているわけでもないし。つーか、もともと任務が入るような奴じゃないらしい」

「どういうことだ？」

「上忍、てのはそうらしいんだが。なんつーか、里の枠に入ってるような奴じゃねぇってことだな」

「そんな奴がいるのか？」

キバが問う。彼もサスケと同じく、現在の状況に苛ついていた。予選でナルトと戦ったときのことが忘れられない。少なくともナルトより自分のほうが上だと思っていた。

なのに、負けたのだ。

悔しいなんてものではなく、自分自身に対して怒りさえ覚える。

卒業してからそれなりに任務もこなしたし、修行もした。だがそれでも足りなかったということか。それともナルトがキバ以上に経験を積んだということなのか。紅が上忍として劣っているとは思えないが、やはり暗部として活躍したカカシのほうが上だろう。

そのカカシと修行したからナルトは・・・。

キバは今回の修行で、紅以外の上忍の教えというものに期待していたのだ。

「対応した奴もあんま、よくわかってねえみたいだし、追求するのも面倒だから聞いてねえ」

「それで、どうするんだ？・・・解散していいのか」

ネジの言葉に皆一様に動きを止める。

「いや、これは一応任務だからな。とにかく3ヶ月は修行しろ、ということだ。まあ、そのうち来るだろうから待ってろ、てな」

「チッ」

サスケの舌打ちに、彼らの苛つきがピークに達そうとするのが、わかる。あのシカマルでさえ、この状況に少々嫌気がさしているようなのだから。

ヒナタは彼らの気を紛らわせようと、茶を入れるため急須を手にした。囲炉裏に掛かっていた空の鍋を外して炊事場に持っていき、替わりに湯を沸かすための小さな鍋に水を差し、囲炉裏の真上から下がる調節棒に掛け、新しい茶葉を急須に入れてくるためにもう一度炊事場へ向かった。

「・・・それで、どういう奴が来ることになっているんだ？」

囲炉裏を囲むように座っている少年たちは、ヒナタの行動を見るともなしに眼で追いながら、それぞれの心を静めていたが、彼女が炊事場へ消えたところでネジが言った。

「伝説ばかり多くて、どれが本当なんだかよくわかんねえが、とにかく腕は立つ。らしい。あとは名前ぐらいしかわかんねえ」

「なんて言うんだってばよ」

「自来也」

「・・・でぇ～～～！！！」
ナルトの雄叫びに、炊事場のヒナタは思わず茶筒を落としかけた。
「うっせーよ、ナルト。何騒いでんだ！」
真横で叫ばれたキバが、ナルトの頭を小突く。
「だってよ、だってよ。そいってば、俺、知ってるってばよ！」
「はあ～？」
キバの小突きも、シカマルのやる気のない返答も気にならないようだ。
「だから、そいってば、決勝前に俺に修行つけてくれた奴だってばよ」
「あの役立たずの口寄せか・・・」
さすがにサスケのこの言いぐさには睨んだが、それでも構わず続ける。
「あー、なんかわかるってば。エロ仙人なら捕まえてこなきゃ、来ないってばよ」
「何だと・・・？」
ネジがぴくりと反応した。
「んー、だから、面倒くさがりなんだってばよ。シカマルと張るくらい。だから引っ捕まえて来なきゃ、無理だって」
「そうではなく、誰がなんだと？いま、エロ仙人とか言わなかったか？」
「ああ、そうなんだってば。すっげぇ面倒くさがりでさ、なかなか修行見てくれないくせに、そういうことにはすっげぇマメなんだよなあ。大人って変だってばよ」
「まあ、とりあえずどういう奴かわかったんだから、ナルト、連れてこいよ」
「なんで俺なんだってばよ」
「お前、知り合いなんだろ？どこにいるのかわかるんじゃねぇのか」
「里にいるんなら、だいたいわかるかな。うーんと・・・多分、

女風呂とか女風呂とか女風呂とか、だってばよ！」
得意気に言うナルトにシカマルがため息を吐く。
「女風呂しかねぇじゃねえか。んじゃ、明日にでも里に行って、片っ端から銭湯覗いてこいな、ナルト」
「だから、なんで俺なんだってばよ」
「いいじゃねぇか。どっちにしろ、顔を知ってるのはお前だけなんだし。里に行って、ラーメンでも何でも食ってこいよ」
「え、マジ？んじゃ行く！」
ラーメンの一言に反応し、快く承諾するナルトを横目に、ネジとキバは一抹の不安を感じていた。

エロ仙人・・・？

修行１５日目

修行１５日目。
ナルトが里に行ってから、早３日。いまだ音沙汰はない。
「あの、ウスラトンカチ。何やってんだ」
こんなことなら見張り役についていけばよかったと、サスケは心底そう思う。
「里といっても結構広いし、なかなか見つからないのかもしれないよ」
「どーだかな。案外、これ幸いとラーメン食いまくってんじゃねぇのか」
ヒナタのフォローもキバの一言で地に落ちる。
昼食には少し早く、かといって修行のネタも尽き、彼らは休憩に入っていた。優秀とはいえ所詮は下忍。持ち札は少なく、バリエーションに欠ける為、飽きがくるのも早い。自己流の修行も１５日目に入れば気力も萎えだしたということか。全部で６人。互いに組み手をすることもあるが、ナルトのいない今では、どうしても１人余る。ナルトがいたとしてもヒナタと組もうとする者がいないので、どちらにしても１人余っていたのだが。同じ白眼だからか、それとも分家としての気遣いか、比較的ヒナタと組み手をすることの多いネジも、最近では１人で修行するほうが多い。そのネジはさすがというか、休憩に入ることもなく、黙々と鍛錬を繰り返している。
「その上忍が来たとしてよ。ヒナタ、お前大丈夫なのか？」
「え、・・・う、うん。みんなに、これ以上置いていかれないように、がんばるね」
修行についていけられるかどうかを、心配したわけではないのだが。省みられることの少なかった彼女は、自分が誰かの気を惹くとか、そういった考えは端からしない。ナルトの連れてくる上忍が、彼曰く、エロ仙人だということについても、「そう」と答えただけ

だった。
　人を窺い見るような態度には、多少の苛つきを感じるが、見慣れているキバでも時折、どきりとするような表情をヒナタは浮かべる。
　誰かに対して見せる顔ではなく、ヒナタが独りで居るとき。そう、独りで何をするでもなく月を見ているようなときに見せる顔。
　初秋の月。輝く月光に照らされた彼女の白い顔、月のような色の大きな瞳。小さな桜色の唇や、形の良い柳眉に鼻。そして端正な顔を縁取る黒髪の艶やかなこと。未だ少女の域にある彼女の、男たちの賞賛を約束されたであろう未来を嫌でも思い知らされるのだ。同期で一番だと言われたサクラさえも凌ぐのではないのかと、キバは密かに思っていた。表舞台に出ようとしないから、誰にも気づかれていないだけなのではないのかと。だが、あと数年もすれば彼女の意思に関係なく、花は開くだろう。

そのとき、俺はどうするのだろうか。ひょいと現れた男に浚われるのを、黙ってみているのだろうか。
・・・！

真っ昼間に突如現れた自分の恋心に、キバは戸惑う。
「いや、待て。・・・違うだろう！？」
　とにかく落ち着こうとしているのだが、そうすればするほど焦る。今まで何とも思っていなかった。気にはしていたが、それは弱い仲間として気にかけていただけだ。それが、まさか・・・。

いや、そもそも恋って何だ？好きって、どこまでいけば色恋の好きなんだ？赤丸を好きだというのと、どう違うんだ？

なんだかよく聞き取れないがぶつぶつと呟きながら、赤くなったり青くなったり、うがーっと手で顔を覆い隠したと思ったら、いきなり座り込んで、また立って。

彼の中で何が起こったのかわからないが、うろうろと落ち着きなく騒ぐキバの横で、声をかけていいものかどうかわからず、手を出しては引っ込めてを繰り返すヒナタの様子を、シカマルとサスケが呆れ顔で見ていた。

「・・・バカだとは思っていたが、あいつもナルトと張るな」

「ほんっと、めんどくせー奴」

キバの慌てだした理由がわからずとも、何となく予想はつく。彼らとて、この数日を共に過ごしたことで、ヒナタのことが多少なりともわかってきたのだ。そうして彼らの知っている他の少女に比べて、彼女の良さも見えてきたのだ。忍、ということに限定すればヒナタは劣っているのだろう。修行を続けているところで、先があるのかよくわからないし、相変わらず何でもないところでずっこける。だが、1人の少女としてみれば、ヒナタは及第点以上のものがある。

女イコール姦しい、これがサスケの認識である。

女イコールめんどくさい、これがシカマルの認識である。

彼らのこの認識の好対照にヒナタはいたのだ。そして、何気ない彼女の表情に心捕らわれたことがなかったとは言えない。だがキバより、遥かに冷静に状況を把握できる二人の少年は、自分たちの心に芽生えた感情を育てれば恋に発展することも、またそれ以上に、恋に育ててしまったならば非常に面倒なことが起きるということが十分にわかっていた。

「・・・早く気づけよ」

誰に聞かせるつもりもないサスケの呟きと、異様な殺気に気づいた赤丸が、慌ててキバに吠えかかる。

「んだよ、赤丸。何騒いでん・・・！」

頭の上で吠える赤丸の声に、ようやく現実に戻ったキバは自分に向けられている殺気に身構え、固まる。

そこには、今まで修練を続けていたはずのネジが、その白眼も全開にキバを睨んでいた。

「うっ・・・！」

蛇に睨まれたカエルの心境なぞ知らないし、知りたくもないが、多分こんな感じではないのかと背中に流れる冷や汗を感じながら、キバは変に納得した。
そう言えば、スリーマンセルを組んだ当初からさりげなくヒナタを気遣っている風のシノが、一向に行動を起こさないのを情けない奴だと思っていたが、こういうことだったのか。
「キバくん。どうしたの？」
何に焦って騒いでいたのかわからないが、今度は何かに怯えているキバの顔をヒナタが心配そうに覗き込む。
う・・・やめてくれ。
普段、目を合わせようとせず距離を保とうとするヒナタが、こんな風に誰かを心配するときは一気に距離を縮める。それが嬉しくて、時々はわざと大げさに騒いだりしたものだ。
だが、今日ばかりはやめてくれ。
数十メートル先では、いまもネジがその白眼で射殺そうとばかりに睨んでいるのだ。
大体、んな距離があるのに、なんで俺の心の機微なぞわかるんだ！？恐るべし、白眼！！
「・・・キバくん？」
そして、何故この近さで俺の焦りとあいつの殺気が読めないんだ！？飾りか、白眼！！
「・・・端で見てる分には笑えるな」

「火の粉が降りかからなきゃ、どーでもいい。・・・はぁ、ちと早いがメシにするか」
青さを薄めた秋の空に浮かぶ薄い雲を眺め、シカマルがため息を吐いた。

「ネジ。お前さ、ちょっくら里に行ってナルトを探してきてくれないか」
その日の夜。夕食後のお茶を啜りながらシカマルが提案した。何事も面倒くさがり頓着しない彼だが、何故かお茶にだけは煩く、里への買い出し時にもわざわざ銘柄指定をするのだ。これでなくては駄目だ、というのではなく幾つかを上げ「適当にどれか」と言うところが彼らしいと言えば、彼らしいのだが。
「のんびり待っててもいいんだけどさ、里の状況を考えると、んな悠長なことも言ってられねーだろ。めんどくせーけど、仕方ねーじゃん」
何故、と目で問うたネジに、シカマルが足りない言葉を補充する。ネジやサスケは察しがよく、ナルトやキバと話すより楽でいい。会ったこともない人間を捜すのは無理だが、知っている人間を捜すのに白眼の能力以上に役に立つものはない。自分に白羽の矢が立った理由を聞くまでもなく理解したネジは、無言でそれを了承する。
「ついでに茶、頼むな」
「あ、ついでに俺んち寄って、赤丸の干し肉取ってきてくれねーか？裏美用に持ってきたやつが少なくなってんだ」
「アカデミーの資料室から遁甲術の巻物も2，3頼む。中忍級のものなら何でもいい」
「あ・・・包帯もいくつかお願いできる？あと、傷用の塗り薬も・・・」
矢継ぎ早に三つ、遠慮がちに一つ。
ネジはこめかみを震わせながら、これも無言で了承した。

修行１６日目

修行１６日目。
ネジは明け方に里へと向かった。ナルトを探し出すくらいならわけないのだが、頼まれた「おつかい」も済まさなければならない。

「ネジって、マメだよなあ」
今夜の夕食作成はサスケである。彼とネジの間で廻っていた食事当番も、比重はネジの方へ傾きつつあった。
「意外とな。あいつは細かいところでも手を抜かない」
同じ食事当番として、何度かネジの仕事振りを見ていたサスケにはわかる。彼は本当に手を抜かないのだ。下準備の段階からきっちりと手際よく、仕事をこなす。
「んな融通のきかない性格じゃ、将来ハゲるんじゃないか？」
「そ、そんなことないよ！ネジ兄さんは自分に厳しい人だけれど、・・・人には、優しいもの」
これもサスケにはわかる。彼は自分ができること、していることを他人に求めないのだ。サスケが手抜き料理をしようと文句は言わない。
「お前、よくそんなことが言えるなあ。中忍試験の予選ん時、あいつにどんな目に遭わされたのか覚えていないのか？」
キバは心底呆れた。彼自身は試合を見ていないのだが、後日に聞いた話だけでも結構なものがある。言葉で責め、最後には殺されかけたと言うではないか。事実、ヒナタは入院し、退院後もキバの横で血を吐き倒れ、またもや入院してしまったのだから。
「あれは・・・仕方ないよ。試験だったんだし。ネジ兄さんは修行中や実戦では人にも妥協しないけど、普段は・・・優しいよ？」
確かにヒナタとの試合中に感じた陰険さは、ない。ナルトとの一戦でわだかまりが解けたのだとも思うが。

思えば、この共同生活での修行は、彼らにお互いの別な面を発見するよい機会となっていた。これも里の重鎮たちの狙いかと思うと、なんだか嵌められたようで釈然としないが。

「まあ、面倒見はいいわな。あんなめんどくせーて思うことも、黙ってやるしな」

忍としての状況把握、情報分析は需要なことだ。彼らがネジに対しての認識を良い方へ改め、誤解が解けていくのがヒナタには自分のことのように嬉しい。

「うん。ネジ兄さんがアカデミーに入ってからはあんまり会えなくなったんだけど、それまでは日向の道場に通えなくなった私に稽古つけてくれたり。・・・小さい頃からいろいろと助けてくれたの」

「なんで通えないんだよ?」

「あ・・・え、えと。・・・見込みないから立ち入り禁止、なんだって」

キバは時々、痛いところを突いてくる。

「でも!独りでもネジ兄さんが教えてくれたことを復習したり、アカデミーに入ってからは、いのちゃんやサクラちゃんが教えてくれて・・・。そう、二人もすっごく優しいの。私、途中入学だったから、わからないこと多くて。いっぱい面倒かけちゃったんだけど、いつも親切に教えてくれたんだよ」

重くなりかけた空気を弾き飛ばそうとするように、ヒナタが努めて明るく言う。あいつらが親切に一体何を教えてくれたんだ、とキバは疑いの目を向け、どうせろくでもないことだろうと、サスケは確信した。

「・・・まあ、いのも面倒見はいいな」

ぼそっと呟くシカマルの声に、キバとサスケが勢いよく振り向いた。

「・・・何だよ?」

自分でも意識していない呟きの内容を思い出し、シカマルが僅かながらに赤面する。普段焦りの欠片も見せないシカマルの、彼らし

くもない狼狽に二人の少年はにやにやと笑った。
「ふーん、お前がなあ」
「何か文句があるのか？」
「いや、別にー？」
キバの意味ありげな科白に、サスケの含み笑い。それに対するシカマルの態度に、彼らの間で何かが起きているのだろうが、ヒナタには検討もつかない。

こんなとき、ネジ兄さんがいれば尋ねられるのにな。

ナルトを迎えに行った彼とは今朝、別れたばかりだ。何日かかるのかわからないが、早く帰ってきて欲しい。
辞退しようと思った今回の修行を結局受けた理由は、任務の二文字ともうひとつ。
褒美、だと思ったのだ。
人並み以上にがんばったとは言わないが、それでも何処かで誰かが見てくれてて、褒美をくれたのじゃないかと、思ったのだ。迷惑だろうし、あんまり近づいて煩わしてはいけないと思った彼と、彼らと、共に過ごす口実を与えてくれた。

本当は紅先生や、いのちゃんにサクラちゃん。そうだ、ハナビとも過ごしたかったな。
・・・いけない、いけない。

少しだけ満たされた喜びの下から、新たな望みが顔を覗かせる。
ヒナタは自分を叱責しながら、新しく芽生えた望みの芽を摘みとった。

わん。

ここぞとばかりにシカマルをからかう態勢に入っていたキバの隣で、赤丸が小さく吠える。
「ようやく帰ってきたか」
赤丸と同時に、サスケが気配を感じ取る。その声に呼応するように他の三人は、ホルスターからクナイを抜き取ろうとした手を戻した。

気配を消すどころか物音も消さず、ナルトが派手に戸を開け入ってきた。
「たっだいまー、てばよ！」
「「遅い！！！」」
キバとサスケの一喝に、ナルトが思わず後ずさる。
「な、なんだってばよ」
「てめぇ、一体いままで何やってたんだ！」
「エロ仙人探しに行けって、言ったじゃんか」
「確かに探しに行けとは言ったがな。いつまでかかってんだ」
今までの焦りはどこへいったのか、シカマルが平時の落ち着き払った声で言った。内心、助かったとナルトに感謝したいところだが、サスケの怒りの前ではそうもいかない。とりあえずこの場を治めるためにも、めんどくさいが聞いておくことは聞いておく。
「だって、ラーメン食っていいって、言ったってばよ」
「それも、確かに言った。だが、人一人捜すのに何日かかるんだ？」
「あ、それはすぐに見つかったんだってばよ。やっぱ、女風呂覗いてた」
どうだ、と言わんばかりに胸を張る。
「・・・で、その後は？」
サスケの声音の危険さに何故気づかないのか、ヒナタに劣らぬ鈍感少年は嬉々として続ける。
「ラーメン食ってた」

「・・・何食？」
「んーと、着いたのが昼だから、まず一杯。そんでエロ仙人見つけたから、詫びとして夕メシに奢らせて、次の日に逃げられたから朝に食って追いかけて。そんで昼に詫びで奢らせて、夜に逃げられて・・・」
延々続きそうな馬鹿げた話が、ナルトの腹に命中したサスケの渾身の一撃で終わる。
「そんなバカは放っておけ！！」
サスケは言い捨てるが、土間で悶絶するナルトを放っておくわけにもいかない。ヒナタが慌てて駆け寄るが、ナルトが開け放したままの戸の向こうから知った気配が近づいてきて、そのまま外へ出た。
初秋の、少し冷えた風に頬を撫でられながら暗闇の向こう、林立する木を見やる。白眼を使えばすぐにわかるのだが、月の光を頼りに目を凝らす。
「・・・来たのか」
気づくと、キバやサスケ、シカマルも外に出てきていた。知った気配と知らない気配。誰と誰のものなのか、皆わかっていた。
「ったく、そんなせっつかんでも歩いておるじゃろ。可愛げのない奴じゃ」
「そんなものあってたまるか」
ネジの声を聞き、ヒナタがほっと息を吐く。長い間離れていたわけでも、危険な任務に赴いていたわけでもないのに、彼が出かけてからヒナタが気を張っていたのを知っている。何に対して緊張していたのかわからないが、ヒナタは自分たちが思っている以上にネジを頼りにしているのかもしれない。青みを帯びた乳白色の瞳が輝くのは、月に照らされただけだとキバは思いたかった。
「ようやく、お出ましか。」
シカマルは闇から現れた人物を見上げた。忍とは思えない派手な格好に、２０日近くも遅れた割には一向に悪ぶれたところも、詫びの一言もないふてぶてしさ。「伝説」の欠片も見当たらない。

「なーんで儂が、こんな山奥で、こんなガキどもの相手をせなならんのじゃ」
「ガキで悪かったな。俺も任務でなければ、こんなところに居はしない」
下から睨め付けるその目には、写輪眼が現れている。
「ほう・・・お主、うちはか」
「うちは、サスケだ」
怒りも露わに睨んでいる写輪眼をものともせず受け止め、自来也はおもしろそうに笑った。
「お主は・・・犬塚か」
「犬塚キバだ。・・・なんでわかんだよ?」
「忍犬使いと言えば、木の葉では犬塚だろう。・・・しっかしぶっさいくな犬じゃのう。」
「なんだと!赤丸は不細工だが、忍犬としては一流だぞ!」
自来也の言葉に火がついたように吠えた赤丸だったが、キバの言葉に消沈し黙り込む。
「・・・庇うか貶すか、どっちかにしてやれよ」
「ふむ・・・お主が、奈良シカマルか。決勝で笑える試合をした奴じゃな」
「笑える試合って、どんなんだよ」
めんどくせー、そう言ってそっぽを向くシカマルに目を細め、最後に残った少女を見る。
「あ・・・日向ヒナタです。・・・よろしくお願いします」
ぺこりと頭を下げる。さらさらと音を立てそうな黒髪が揺れる。
「お主・・・」
自来也は屈み込み、ヒナタの逃げる視線と目を合わせる。
先程までのにこやかな雰囲気は消えていた。年相応に皺の刻まれたその顔からも、笑顔は消えていた。
叱責を受けるときは、いつも上からだった。頭の上から鋭い視線で射抜かれることには慣れていた。そんなときはただ黙って、降り

かかる火の粉が収まるのを待っていればいい。俯き、時に謝罪し、相手が諦めのため息を一つ吐いて去っていくまで、ただ耐えていればよいのだ。ヒナタはそうやって幾度も、喉につかえる暗い石を飲み込んできた。数を数えることで心を静めてきた。けれどもこんな風に、誰かに覗き込まれたことはいままで一度もなかった。

ど、どうしたんだろう？何か、気分を害するようなことをしてしまったのだろうか？

焦る頭で考えてみるが、何も思いつかない。目上の人には話しかけられるまで口を利いてはならないと教えられてきた。

そう言えば！目を向けられただけで、話しかけられたわけではなかった。先読みしすぎて出過ぎた真似をしたことを、怒っているのでは！ああ、それとも、このはっきりしない性格をもう感じ取ってしまっているのかもしれない。

何に対して怒られているのかわからないので、何に対して謝罪してよいのかわからない。とにかく訳もわからずに謝罪して、それ以上に怒らせてしまったことは多々あるのだ。この場から逃げてしまいたいのだが、下から逸らすことを許さない強い光で覗き込まれ、それもできない。

「お主・・・！」

がしっと肩を捕まれ、その場に緊張が走る。ネジは白眼を発動させ右手をホルスターに伸ばす。腹を押さえていたナルトやキバも、クナイを手にした。サスケは鎮めた写輪眼を再び浮かび上がらせ、シカマルは頭の後ろで組んでいた手を外す。

「お主・・・かっわいいのう～」

「え・・・？き、きゃ～～～！」

肩を捕まれていた手が両脇の下にきたかと思うと、一気に天高く

持ち上げられてしまった。一体何が起きたのか状況を把握する間もなく、そのままの勢いでぎゅっと抱きしめられてしまう。
「男ばっかりかと思っておったが、ええのう、ええのう、おなごはええのう～」
今までの真剣な顔はどこへいったのか、だらしなく目尻を下げ、鼻の下を伸ばした顔でヒナタに頬ずりする。
「え？えっと・・・あの、仙人さま？」
ヒナタには何が起こったのか理解できない。記憶にあるかぎり、今まで一度も誰かに抱きしめられたことも、かわいいなどと評されたこともないのだ。実の親と手を繋いだことがあったのかさえ、思い出せない。それが初対面の人間に抱きしめられ、というか抱き上げられている。
とりあえず離れたほうがいいのかなと思うのだが、ヒナタの腰程もありそうな力強い腕は、多少身動いだぐらいでは外れそうにもない。それに抱き上げられていることで足場を失ってしまった体勢では普段の力も出せない。
「いい加減にしろ！！」
声より先に背後から飛んできたクナイを、自来也は難なくかわす。
「危ないのう。ヒナタに当たったら、どうするんじゃ」
「俺がそんなへまをするか」
振り向くとそこには、新たなクナイを手にしたまま戦闘態勢を崩さないネジがいた。
「あいつは小姑みたいな奴じゃのう」
「誰が、小姑だ」
「ここに来るまでも、儂をせっついてせっついて。おまけに監視がきつくてのう」
「お前が隙あらば逃げようとするからだろう！」
「やっぱり男は大らかなほうがいい。そうじゃ、儂ならぴったりじゃ。どうだ？」
どうだ、と聞かれても困る。それにこの体勢もどうにかしてほし

い。ヒナタを抱き上げたままで離そうとせず、しかもいまは片手で抱かれている状態だ。正しくは、片腕の上に座らされている格好である。

「せ、仙人さま？」

必然的に見下ろすようなことになってしまって、落ち着かない。

「うん？婿取りの話じゃ。なーに、少々年の差があるが、愛があれば構わんじゃろ」

「・・・え？」

「それは両想いのときにつかうセリフだ！」

キバが吠えてくるが一向に気にしない。

「それに心配せんでええ。ヒナタは絶対にべっぴんさんになるぞ。数多のおなごの成長を見てきた儂が言うんじゃから間違いない。そうじゃのう、絶世の美女、とやらになるかもしれんぞ」

ここまで言われ慣れていない言葉を遣われると、否定の前に思考が停止してしまう。完全に固まってしまったヒナタに自来也は上機嫌の笑顔を向ける。周りでネジやキバは騒いでいるのだが、全く聞こえないようだ。

自来也はどこまで本気なのか疑わしいが、当事者の三人には由々しき事態である。残りの三人のうち一人は興味津々で見物しているが、二人の少年はあまりのばかばかしさに呆れ返ってしまった。これ以上は付き合いきれんとばかりに、小屋へと引き上げる。だが、ネジのおつかい袋の中から、それぞれの目当てのものを受け取るのは忘れない。

「きれいなおなごの横には、強い男がおらんとのう。儂はこう見えても結構強いぞ。ヒナタはなーんにも心配せんでええ。儂が守ってやろうな」

ヒナタの頭が一気に覚醒する。

「だめです！！私なんかのために、戦ってはならない。二度と、

誰も！」

戸口を入ろうとしたシカマルや、サスケの足を止めるだけの強さがあった。この場にいる誰もが、ヒナタがここまではっきりと強く、何かを言ったことがないことを知っている。

そして、彼女の過去を知っていた。

哀しみや寂しさを怨みに換えて、誰かを憎むのは楽だった。宗家を憎み、運命を呪い。そうやって自分を守り、鍛え、ネジは強くなった。

だが、ヒナタはどうしていたのだろうか。ネジに詫び、父に詫び、一族に詫び。自分を責めて生きてきた少女の心には、何が生まれたのだろうか。何が残されたのだろうか。

ヒナタの言葉に、ネジは愕然とする。

自分を取り巻く者たちを重要度毎に階段を上らせたとしたら。ヒナタの場合、その最底辺には、彼女自身が座っているのだ。

修行２６日目

修行２６日目。
　自来也はカリキュラムを組む、ということはしなかった。よく言えば自主性に任せ、悪く言えば野放しにしていた。だが彼らの動きは見ていて、確実に弱点を言ってきた。
「キバ、犬に頼りすぎだ。互いの力が均等でなければ、乗られるほうが耐えきれず、結局は共倒れになるぞ」
　ネジとの手合わせ中、キバは一度も勝てていない。自分でも赤丸を頼りにしすぎているのはわかっていた。物心ついたときから、いつも廻りに犬がいた。幼少の頃はキバより遙かに強く、経験も豊富な成犬の忍犬たちに相手をしてもらっていた。犬に遊んで「もらう」というのも変な話しなのだが、実際にそうだったのだ。赤丸を宛われてからもその癖が抜けず、どうしても犬を頼らずにはいられない。
「お主は少し犬から離れて、己自信の力だけで戦ったほうがよい」
「・・・！俺は忍犬つかいだ」
「忍犬がいなければ何もできんでは、話しにならんじゃろ？」
　痛いところを突かれキバは黙り込む。赤丸がいてさえネジには敵わない。ネジが強いといっても所詮、下忍だ。里にも外にも、強い奴らはいくらでもいる。もし赤丸が負傷したとき、自分では赤丸を守り、窮地を抜け出すことさえできない。
　キバ単体で見れば、下忍のどの辺りのレベルなのか。見たくもない事実を、知らなければならない時がきている。
「ネジ。お主も白眼をつかうのを控えろ。日向一族はなまじ目が良すぎるために、見えぬものを見ようとしない」
「・・・どういうことだ？」
「それはお主で考えろ。お主の洞察力は、白眼だけで得られるものではないだろう？」
　意味ありげににやりと笑うと、赤丸を片手で掴んだ。

「おい！赤丸をどうするつもりだ！」
「お主がつかわぬように没収するだけだ。・・・こいつにはヒナタの相手をしてもらう」
ヒナタの名が出て、キバと赤丸は静かになり、ネジは瞳を揺らした。彼らの心に去来したものは恋心だけではない。
白い少女は最近、元気がない。考え込むことが多くなった、ような気がする。

「何悩んでるのか知らないけどさ、言えばいいのに」
去っていく自来也の背を見ながら、キバがぽつりと言う。
「あの人は見かけによらず頑固だからな。・・・弱音も吐かない」
「確かにそうだけどさ。1人で悩んでたって解決しないこともあるだろ。俺たちじゃ力になれないことでも、言ったら楽になることだってあるじゃないか」
ヒナタが何かに悩んでいることは、少年たちにも自来也にもわかっていた。鈍感だと言われるナルトでも感じていた。いや、始めに気づいたのはナルトだったのかもしれない。生まれたときからいわれのない迫害を受けてきた少年は、自らの境遇の理不尽さを口にしない。だが、言わないから何も感じていないのではない。あまりに大きくて、言えないのだ。
「頼って、欲しーんだけどなあ」
秋雲を眺めながらのキバの言葉は、意識したものではなかった。けれどもそれは、ネジの心境をも表していた。

憂いの多い人生を歩む少女が思い悩むのは、何もこれが始めてではない。ネジはいつも静かに見守り、ヒナタが話そうとするまで待っていた。悩みは声にされず、消化されることも多々あったのだが。
彼女は悩み事が生じると、夜の散歩に興じた。日向宗家の屋敷を囲むように分家が軒を連ねる。彼らの意識は侵入者に向けられるものであって、内に向けられたものではない。広大な宗家の敷地内に

は小さな山や、春に草花が咲き誇る草原があった。彼女が歩くのは敷地内に限られていたので、日向の中でも気づいたものが何人いたのか。ネジがそれを知ったのは偶然という他はない。

だが気をつけていると、彼女が外を出歩くことが結構多いことに気づく。木に登り月を眺め、草むらに寝転がり星の光を受ける。時折現れるネジに驚くこともなくなり、隣に座ることを許されると、彼女がただ、夜空を楽しんでいるわけではないことを知った。ぽつりぽつりと互いの近況を話すこともあれば、黙って座っていることもあった。もちろん近況といっても屋敷からでることのないヒナタに話すほどのものはなく、専らネジにアカデミーのことを聞いていたのだが。

話し始めるための水を差し向けることはあったが、問い質したことはない。しかし今回ばかりはそうも言っていられないような気がする。何がとは言えないが、とにかく、とても嫌が感じがするのだ。

彼女が抱える自責の念が、あまりに大きいことを知ってしまった。三歳の子供が大人の忍に敵うはずがないことなど、あの頃も今もわかっている。わかっていて見ようとしなかった。気にすることはないのだと言ってやれてたなら、彼女の自責の念はあそこまで大きく成長しなかったかもしれない。

ヒナタが誰かを頼るのなら、それは自分であって欲しい。しかし彼女が自分自身を責め続ける以上、ネジを頼ることはないのだ。それならばネジが行動を起こすしかないであろう。

ネジは、ヒナタが苦しんでいるのをこれ以上黙ってみているつもりはなかった。

誰かに彼女を託す考えなど、それ以上に持ち合わせていなかった。

「いつまでそうしてるつもりだ」

彼が完全に気配を絶ってしまうと、自分なんかではとうてい感じ

取れない。けれどもヒナタが完全に気配を絶ったつもりでいても、ネジには察知されてしまうのだ。今は、僅かな気配を残したまま近づいてきてくれたので、驚くこともなかった。

「あなたが話したくないのなら、無理に聞くまいと思っていた。・・・だが、できるならその荷物を、俺にもわけて欲しい」

夕食後の長い時間、彼らはいつも同じ時間を過ごしているのではない。早々に眠りにつく金髪の少年もいれば、何が楽しいのか1人で囲碁盤に向かい延々固まる者もいる。ふいっと出かけ酒の臭いをさせながら帰ってくる大人もいれば、泥だらけなって転がり込む少年たちもいた。

ヒナタもよく出かけた。ネジに禁じられていたので遠出はできないが、相変わらず夜の闇に紛れていた。ネジはどこにいても彼女の気配を感じとれるようにしていた。里の中とはいえ、安全だとは言い切れない。木の葉崩しの折、完璧だと思われていた里の安全管理にいくつもの綻びが見えたばかりである。特に彼女は血継限界でもあった。もちろんそれら全てをなしにしても、彼女から意識を放すつもりはなかった。遠いあの日、父に守れと命じられるまでもなく、一生彼女を守っていくのだと決めていたのだから。

「俺では役に立たないかもしれないが、ひとつの頭で考えるよりふたつのほうが、都合がいい時もあるだろう」

難なくヒナタが上っていた枝まで、一つ飛びで上がってきた。彼女はここまで登るのに、結構苦労したというのに。ヒナタは自分の手が、足が、誰かのものになっていくのを感じる。

「役に立たないだなんて・・・。ネジ兄さんにはいつも助けてもらって、迷惑をかけてばかりで・・・」

ヒナタがアカデミーに入ったのは10歳だ。5歳にはすでに親からも見放され1人で過ごすことが多くなっていた。ネジはアカデミーに入ってからも、下忍として任務につきだしてからも、忙しい合間を縫っては相手をしてくれた。稽古をつけてくれることもあれば、話をしてくれることもある。決して話し上手ではない無口な彼が、

ぽつりぽつりと語ってくれる外の世界は興味深く、ともすれば沈みがちな少女の心を癒してくれたのだ。月に一度、会えるかどうかという状態であったけれども、とても大切で貴重な時間だった。

「これ以上・・・迷惑をかけては、いけないと思うの・・・」

「迷惑などではない。多分、キバたちも同じことを思っているはずだ。あなたの悩みを共に考えたい。力になりたい。俺は・・・」

ネジはふっと目を逸らす。いつもまっすぐ淀みない視線を送ってくる彼にしてはとても、珍しいことだ。だからヒナタは少しだけ緊張して、次の言葉を待った。

「俺は・・・あなたに頼ってほしい」

泳がせた目を戻し、はっきりと言った。そうして怒ったような困ったような、なんとも表現し難い表情を浮かべた。

躊躇いがちに延ばされた彼の右手が、ヒナタの黒髪を優しく撫でる。雲に隠された月が再び現れて、彼の頬が少し赤みを帯びているのを見た。珍しいことに、本当に珍しいことに、彼は照れていたのだ。

ヒナタはなんだかおかしくなって、笑っちゃいけないと思いつつ、でも我慢できなくてくすくすと笑い出した。

「こら」

照れ隠しなのか、頭を撫でていたその手で軽く小突かれる。けれどその顔はまだ赤いままで。年の割に大人びて、いつも一歩も二歩も先を歩くネジの、始めてみせるその様子がかわいくて。

だから、ヒナタは話そうと決めたのだ。

修行２８日目　１

修行２８日目。
昨日の朝出かけた少女は、今日帰ってくる。二日前の夜、ネジと一緒に小屋に戻ったヒナタは、全員を前にして聞いて欲しいことがあると言った。俯いておずおずと申し出た姿はいつもと変わらないが、何かを決心したのだと感じさせるものがあった。
「ヒナタ、今日帰ってくるって言ってたよな。遅くないか？」
すぐに話すと思っていた少女はしかし、一度里に戻ってからと言った。昼に戻るか、夕刻には着くか。少年たちは待っていたが、夕餉が終わっても帰ってこない。
「丸二日も、何やってんだ」
普段騒がしく動きの激しいナルトより、サスケのほうが明らかに短気だと思う。自来也の時もそうであったが、誰よりも先に苛つき始めるのは彼だった。
「苛つくな。ヒナタ様が戻ったとき、お前がそうだとまた黙り込んでしまうだろう」
「わかっている」
彼女の力になりたいと思っているのは、何もネジやキバばかりではない。
「それに、もうすぐ着く。いま、小川を渡ったところだ」
「・・・見てんじゃん」
瞑想していると思っていたネジは白眼をつかっていたのだ。シカマルの呟きに少年たちの頭に浮かんだある考えを、命知らずにも自来也が口にする。
「白眼とはええ技じゃのう。女風呂だろうが何だろうが見放題じゃな」
ネジのこめかみがぴくりと動いたのにも気づかない。
「儂もつかいたいのう。ええのう。修行でどうにかならんかな」

真剣に考え込む自来也を軽蔑の眼差しで睨み、何か言いたそうな少年たちに念を押す。
「言っておくが、日向にこんな下種はいない」
「な、何も言ってないってばよ！」
「・・・ほう？」
「いや・・・なんつーか。つかいようによってはスケベーな術だなー、とは思ったけど」
ネジにじとりと睨まれると、言わなくてもいいことまで言ってしまう。これも白眼のなせる技かと思えるほどだ。シカマルやサスケならどうにか濁すだけに止めることもできるのだが、キバやナルトでは到底太刀打ちできない。
案の上、思いっきり小馬鹿にした溜息を吐かれた。
「た、ただいま・・・？」
カタカタと戸を開けて入ってきたヒナタは、部屋の異様な雰囲気に思わず足を止めた。

毎日風呂に入るわけではなかった。自来也がきてから風呂を沸かすことも多くなったが、それでも2，3日に一回だ。その僅かな機会でヒナタは2度も自来也に覗かれている。そのたびにネジが血相を変えて、殺す殺さないの騒ぎになったがどちらもヒナタが必死に宥めて、納めていた。3度目は絶対に許さんとネジは言い渡した。伝説の上忍に下忍が敵うとも思えないが、彼ならどんな手をつかってでも目的を果たしそうで怖い。
「・・・大丈夫かなあ」
シカマルとサスケに頼んできたのだが、安心はできない。キバはネジと一緒になって怒るし、ナルトでは当てにならないことは証明済みだ。
ヒナタはからかわれているだけだと思っている。どう考えても大人が、こんな子供に興味があるはずがないのだ。同年代の少女と比べて発育がいい方だと自覚しているが、大人の女性と比べるべくも

ない。
　ヒナタは膨らみ始めた白い胸をそっと触る。その手の平には確かに、命の動きを感じる。
　だがこの時計は、１０年も前に錆びついてしまったのだ。
　ネジの申し出は正直ありがたかった。色々と考えてみたが、どうしても１人では無理なのだ。被害は最小限に止めなければならない。彼らに重荷を背負わせてしまうことになるし、とても面倒をかけてしまうけれども、ここで止めなければ里に、強いては彼らに多大な迷惑をかけてしまう。自来也がどれほどの腕前かはわからないが、彼が本当に、生きて伝説になるほどの使い手ならば今を置いて好機はない。
　ヒナタは決意を固めるように、胸元にもう片方の手を添えた。それは、彼女が迷うときに行う癖だと思われているが、本当は違う。ヒナタはそこにあるものを静かに撫でると、小さな風呂場の窓から覗く月に手を翳す。
　湯に濡れた肌は淡い月の光を弾く。白い腕は細くなった。小さな傷も多くなった。ここに着くまで、幾度も転んだ。体が、ヒナタの命令を聞かなくなっていく。
　道が、消える。

修行２８日目　２

風呂から上がって囲炉裏部屋へ戻ると、ネジが自来也の真正面に座り、睨み据えていた。宗家とはいえ自分の立場を考えると、彼にここまでしてもらうのは悪いと言ったのだがネジは頑として聞き入れてくれない。彼はとても律儀なのだ、とヒナタは思っていた。分家だの本家だの、全く関係ないということはこの場にいる、ヒナタ以外の誰もが気づいているのだが。

「お、ヒナタってばきれいじゃん。それ取りに帰ってたのか？」

「え・・・えと、うん」

少女は小さな風呂敷包みを抱えて帰ってきた。その着物は、彼女の持ち物の中にはなかったはずだ。落ち着いた藍の布地に浮かぶ、鮮やかな紅の芙蓉。藍と紅の間は白くぼやかされ、落ち着きのなかにも華やかさがあった。深みのある赤い帯も、結ぶことで裏地の黒を見せ全体の印象を引き締めている。ヒナタの年齢で着こなすのは難しいだろうと思えるその柄。だが彼女にとてもよく似合っていた。

「忍衣でもいいんだけど、見てもらったほうがわかりやすいと思って・・・」

そう言って囲炉裏の前に座った。睨み合いを続けていたネジや自来也、部屋の隅で碁を打っていたシカマルも同じように囲炉裏端に集まったところで、少女の重い口が開いた。

何から話せばいいのか。ここに戻ってくる道中、あれこれと思案したがうまく伝えられる自信がない。きちんと話そうと思えば長くなりそうだし、省略しすぎるとわかり難くい。

「とりあえず、結論から言うね・・・」

夕食後は微睡む赤丸も、今日ばかりはキバの横で起きている。

「私・・・死ぬの」

一瞬、何を言われたのか理解できた者はいなかった。

「多分、あと1年くらい・・・。もしかしたら半年くらいかもしれないけど、確実に終わる」
「な、何冗談言ってるん・・・」
キバは笑い飛ばそうとしたが成功しなかった。
「それでね、すっごく面倒なことをお願いしてるってわかるんだけど。・・・その前に、私を殺して欲しいの」
切実な表情が、ヒナタが真剣だと言っていた。
「・・・何かの、間違いじゃないのか？」
辛うじて口が利けたのは、自来也である。
「赤天を、ご存じですか」
「・・・何それ？」
「このドベ！アカデミーで習っただろ」
「そんなもん、覚えてるわけねーってばよ。で、何それ」
教えろよ、と目を向けられたがサスケにしたって忍術、体術はともかく学科は優等生だったというわけではない。漠然と覚えているだけで、人に話せるほどのものではないのだ。こういうとき、サクラがいれば教科書を読むように疑問に答えてくれるだろうに。いつもは煩わしいだけの、明るい髪の少女がいないことを、これほど残念に思ったことはなかった。
「寄生植物だよ。実に生えた毛が植物や動物、昆虫にしがみつき根を生やし、養分を吸い取って生長する。十分に根が生長した段階で宿主から離れ、地に潜る」
「シカマル、よく知ってるなあ」
「いのに付き合わされたからな。めんどくせーが、断ると余計にめんどーだから仕方ねえ」
男女、学年通してトップを走ったサクラの学科に、唯一対抗したのがいのの薬物の成績であった。花屋の娘としては、絶対に負けられないと彼女はその一点だけは、それはそれは猛勉強したのだ。それに何度も付き合わされた身としては、彼女の執念など迷惑以外の何物でもなかった。だがシカマルの優秀な頭脳は一度覚えたことを

そうそう忘れさせてはくれず、いまでは木の葉が知識を持っている全ての薬草の、効能から生態まで覚えてしまっている。
「で、それがどうしたってばよ。この山の中にでもあるのか」
「あるわけねーだろ。赤天てのはな、実も根も茎も葉も花も、すべてが薬にも毒にもなるっつー代物だ。その一滴で人1人、簡単に死ぬ」
「その昔、赤天の毒を飲み水用の瓶に混ぜられて、一晩で消された里がある。それ以後、赤天を見つけると燃やすようになってな。元々稀少だったがいまではもう、どこにも残っておらんじゃろ」
「・・・それとあなたと、どう関係があるんだ？」
「その赤天の実が、ここにあるの」
そう言ってヒナタは、胸元をとん、と指で突いた。少し俯いて目を閉じ、決心したように彼らに背を向けた。腰を僅かに浮かし、襟元に手を伸ばす。そのまま勢いよくはだけた。
現れた白い背中は華奢だけれども、少し丸みを帯びている。少女が自分たちと違う生き物なのだと教えているようで、少年たちは慌てた。
「な・・・何？」
ナルトの焦った声を背に聞きながら、ヒナタは笑う。
とうに覚悟を決めたこととは言え、恐れはもちろんある。けれども恐れがあるからといって、そればかりを見て生きることは止めようと決めたのだ。道の先に何があろうとも、歩く道に咲く小さな花に笑いかけることを忘れたくなかった。
ヒナタは着物の襟で胸を隠し、彼らに向き直った。
肌理の整った滑らかな白い肌。囲炉裏の火に照らされて、幻想的なまでの美しさ。膨らみ始めた胸が作る微かな谷間の少し上。彼女が困惑したとき手をやるその場所に、禍々しいまでの赤。白い肌に埋もれて顔を出す、鮮やかに妖しい赤の色。
「これが・・・赤天の実」
彼らに衝撃が走った。少年たちはもちろん、諸国を放浪した自来

也でさえ見たことのない実。何十年も前に滅び、残っているはずはないと言われていたものが、いま彼らの目の前にある。
「本当に、そうなのか？」
「はい。そう話していました。私も調べてみましたが、確かに赤天です」
自来也の問いは、ヒナタが何度も何度も考えたことだ。だがその度に期待は裏切られた。
「話していた、と言ったな。いったい誰が、話していたんだ」
ネジの疑問は尤もだ。だからこそ話したくなった。誰に話しても、彼にだけは話してはならないと思っていた。
けれども・・・。
誰に話さなくても、ネジにだけは話さなければならないとも思っていた。
「１０年前。私は雲の里に誘拐されたの」
ヒナタは、はだけていた着物を肩にかけ、着崩れを直した。
「あれは違うだろう。確かに誘拐されかけたが、ヒアシ様がすぐに気づき屋敷の外で助け出されたはずだ」
「表向きはそう。だけど、本当は雲の里まで連れて行かれたの」
「・・・まさか！では、俺の父上は？自らすすんでヒアシ様の身代わりになったと聞いた。それは、そもそもヒアシ様が雲の忍頭を討たれ、それを雲の国に糾弾されたからだろう？」
「父上がそうおっしゃられたのなら、それは本当のことだと思う。その頃、私は寝込んでいたし。体が癒えたときには、全てが終わっていたから」
「では本当に、雲の国まで行ったのか」
「うん。何が起きたのかわからなかったし、とにかく怖かったのだけ覚えてる。どこだかわからないけれど、部屋に連れて行かれて冷たい台の上に乗せられたの。天井からものすごく明るい光に照らされて、すごく眩しかった。何人もの男の人が上から見下ろして、いろいろ話していて。・・・小さすぎると言っていた」

「何が小さいんだってばよ？」
「私が小さいってことだと思う。あの頃は言葉がよくわからなくて理解できなかったけれど、今考えてみるとわかってきたの。多分、あの人たちは血継限界を調べて自分たちのものにしたかった。そのために木の葉瞳術の源流と言われる白眼を調べたかった」
「だからあなたが攫われた。分家では死ねば白眼も消え、意味がないからな」
日向のしきたりを恨みではなく、事実として受け止めたようだ。ネジの声には何の感慨も見られない。
「うん、だから宗家。できれば女の人」
「・・・なんで女なんだよ」
キバやナルトはわけがわからないといった顔をしているが、残りの少年たちや自来也は薄々感じ取っているらしい。一本気なキバや、純粋なナルトに話したい内容ではないが、仕方ない。
「白眼を調べるにしても、1人の体でできることは限られているから、だと思う。だから女の人を攫ってきて、何人か子供を産ませて、その子達もつかって・・・。男の人でもいいと思うけれど、その・・・男の人だと無理に・・・えっと、無理に子供をつくることは難しいからじゃないかな。宗家にしたのは、最悪捕らえた者が自害したとしても、少なくとも一人分の白眼は手に入れられるから・・・」
慎重に言葉を選んで言われた内容をナルトが理解し、顔を歪めた。
「私はあの時3歳で、だから小さすぎると言っていたの。・・・成長するまで飼うにしても、その間何もできないのでは意味がないと」
飼う、という表現に抵抗がないわけではない。だが彼らはそう話していた。
「その時に別の人が来て、例の赤天の実を試してみたらどうかと言ったの。そうしたら他の人たちも賛同して、それでこれを埋めた」
着物の下に仕舞われた実を触る。

「これは手に入れるのも大変だった。とても貴重なもので、おまけに特別に改良してある。お前は運がいい、そう言われた」
「その後、解放されたのか？」
「ううん。あの人たちは私に赤天の実を埋めて、雲の国のどこかに隠しておくつもりだったみたい。だけど・・・日向がきてくれた」
ネジをじっと見る。
「日向が、分家の方たちが来てくれたの。ヒザシ叔父様もきてくださって。あっと言う間にみんな倒してしまわれた。その後、叔父様は赤天の実を見つけられた。すぐに何なのかわかったみたいで、驚いておられた。息のあった雲の忍に問い質して、どのように改良されたのかを聞いたの。赤天は養分を吸い取って生長する。これは生長するとき、宿主の能力をも吸い取る、と」
ヒナタはネジから目を逸らし、何かに耐えるように眉を寄せる。
「赤天は、埋め込まれた瞬間に根を伸ばしていたの。取り出すためには私を殺すしかなかった。分家の方たちはそう話して、私を殺そうとした。禍根を残してはならないって。だけど・・・」
膝の上で両手を握り絞める。
「だけど、ヒザシ叔父様が。・・・分家の方たちを、殺してしまわれた。1人残らず倒されて、私に言ったの。何も、気にする必要はない。生きていれば道は見つかるって」
ぱっと顔を上げてネジを見る。ヒナタはやはり泣いていなかったけれど、苦渋に満ちた顔をしていた。
日向分家の結束力は堅い。叔父が親しく付き合う者もいただろう。全ての者を手にかけたとき、叔父の心に何が去来したのか。強いけれども苦しみに耐える目をしていた。その後、叔父が死に、遺骸は雲の国へと運ばれた。ネジは宗主の替わりに殺されたと言ったが、ヒナタには自分のせいで死なければならなくなったのだと思った。
「ごめんなさい・・・」
「なぜあなたが謝る必要がある。父上は、ご自分が正しいと思ったことをしたまでだ」

ネジは強く言いきった。以前なら、ナルトと戦う前ならこうまではっきりと言い切ることはできなかっただろう。くだらない運命論に取り憑かれ、そこから逃れる努力さえもしなかった自分では。

ヒナタはネジの顔を見て、微かに笑った。長い間気に病んできた塊の一つが今、溶けたのだ。叔父に、仲間を手にかけさせてしまったことをずっと悔やんでいた。叔父に詫びたかったし、それが叶わないのなら、せめて、この従兄に許しを請いたかった。許されるとは思わなかったが、全てを話さなければならないと思っていた。

「・・・その赤天は、能力を吸い取ると言ったのか」

「はい。シノ君の虫のようなものかもしれません。私がチャクラを錬ようとしたり、白眼をつかおうとすると根を伸ばされているような気がします。小さい頃はちょっとした違和感だったのですが、今ではとても大きくなって。チャクラをつかっていなくても感じるようになりました」

「もしかして、お前がよくすっ転んでたのって、それでか？」

「・・・うん。早く走ろうとしたり、飛ぼうとしたりするとね、何か棒のようなものを入れられてるような感じで。関節が動かなくなるの。でも固まるというのとは少し違っていて、だらりと力無く垂れ下がっていたりして、不思議だよね」

いつもと変わらない穏やかな口調だから、話題の深刻さを忘れそうになる。

「日向は・・・宗家は何も知らないのか？」

「うん。叔父様が来られたときは見えていたんだけど、里に着く頃には潜り込んでて少し傷があるくらいだったから。叔父様も何もおっしゃらなかったみたいだし。・・・もし父上に話しておられたなら、私はすぐに殺されていたと思う」

まさか、そう言おうと口を開いたナルトだったが、しかし、音を発することはできなかった。ヒナタの表情、ネジの表情を見ればそれが悲しい真実だとわかる。

こんなとき、ナルトは思うのだ。親の愛情を知らず孤独に震えていた自分と、血の繋がる親が側にいながら愛情を知らず寂しく笑うヒナタと、いったいどちらが幸せだと言うのだろう。
子は親を捨てられない。その反対がいかに簡単に行われようとも、子が親を捨てるのは我が身を切り捨てるようなものなのだろう。自らが不必要なものと認めるようなものなのだろう。
この白い少女が必死でしがみついているのは、果たして親の愛か、自らの存在意義か。

「赤天が何かを知って・・・調べて、どうしても避けられないとわかって。それなら日向や里に迷惑をかけてはいけないと思って、どうにかしようとしたんだけど、駄目で・・・」
「ど、どうにかって。・・・どうするつもりだったんだ？」
キバは聞きたくないと思ったが、聞かずにおれなかった。

「死のうとしたの」

修行２８日目　３

ゆらり、どこからか入ってきた風で囲炉裏の火が揺れる。
「私が死ねば赤天も枯れる。クナイで喉を刺そうとしたり、崖から落ちてみようとしたり、火に飛び込もうとしたり。いろいろ試してみたけど、駄目だった。・・・私が死のうとすると必ず、体の自由が利かなくなる。意気地がないだけだと思ったけれど、何かの本に、生き物が自ら命を絶とうとするときに出る物質に赤天の実は反応して、それを阻止すると書いてあったから、私が自分で、私の意志で、死ぬことは不可能だと知った」
ヒナタは俯いていた顔を上げると、全員をゆっくりと見回し、深々と頭を下げた。
「どうかお願いします。私を殺してください」
誰一人、言葉を発することはできない。
「もう少し時間があると思ったんだけど、ここ1，2ヶ月でどんどん体の自由が利かなくなるのがわかるの。それに、五日ほど前から赤天の姿が見え始めて・・・私が死ねば自然と赤天は出てくるだろうし、それを回収するために雲の忍が見張っているはず。いまならまだ、見張りだけで数は多くないと思うから、どうか、いますぐにお願いします」
山中なら戦いが起きたとしても、被害は最小限に食い止められる。里中で争いが起きたばかりの木の葉では、被害は先の木の葉崩しよりも大きいかもしれない。建物が壊れるぐらいならともかく、誰かが命を落とすようなことがあれば、日向の立場がない。見張りは一人ではないかもしれないが、多くもないはず。彼らはヒナタの命がまだ尽きないことを知っている。大人数で他国に長期間忍び込むことなど、不可能だ。それならば、自来也がいるいまを置いて他にはない。
「・・・本当に、手はないのか」

自来也が詰めていた息を吐き出す。
「できるかぎりの方法で、調べてみました。日向には、里の半分以上の書物が収められていると言われる倉があります。その倉にある全ての書物を調べました。アカデミーに入ってからは、そちらの書庫も調べてみたけれど、結果は同じでした」
「でも、でもさ、何か見落としてるかもしれないってばよ」
「・・・だといいんだけど」
「だろ！ヒナタだって修行とかさ、忙しい合間に調べたんだろ？だったらぜってー見落としてるってば！」
「・・・忙しくは、なかったかな。時間だけはすっごく沢山あったから」
「なんで？」
「雲の国から帰って、少ししたら離れに住むようにと言われたの。４歳を過ぎた頃には、もう道場に来なくていいと言われて。１０歳でアカデミーに入るまでの６年間、毎日何もすることがなくて。・・・あ、でもネジ兄さんが時々来てくれて、技とか教えてくれたよね」
ネジはアカデミーに入るまでは毎日、日向の道場に通っていた。その帰り、気まぐれに彼女を訪ねることがあった。いつ行ってもヒナタはいて、いつも嬉しそうに出迎えてくれた。ネジは知らなかったのだ。ヒナタが一人、離れで暮らしていたことなど。知っていたなら、もっと彼女を訪ねていただろうに。
「・・・ヒナタ、お前さ。なんでそんなに、何でもないことのように話すんだよ。もっとさ、もっとこう。泣くとか喚くとか、普通するだろ？本当に、本当なのか？」
キバの疑問は、この場にいる誰もが感じていたことだ。ヒナタがあまりに落ち着きすぎていて、本当の話なのか判断がつきにくい。もし自分なら、と置き換えて考えてみるとここまで落ち着いて話すことができるのか、疑わしい。
「そういうのは・・・飽きちゃった」
「・・・は？」

ヒナタは照れたように笑った。
「日向の敷地にあった小さな山に、川が流れてるの。あの小川より少しだけ大きい川で、少し上ると小さな滝があるの。・・・7歳の頃、始めて赤天の実が何かを知って、自分がどうなるのかわかったとき、そこに行って・・・泣いたの」
囲炉裏の火に照らされて、ヒナタの白い瞳は橙に見えた。
「泣いて、泣いて、泣いて、泣いて。叫んで・・・泣いた」
先程の照れたような笑いは消えていたけれど、それでもやはり、彼女は泣いていなかった。
「滝に入って叫んで泣いて、苦しくなって岸に上がって。そこでまた泣いて。疲れて眠って見る夢はいつも決まって恐ろしい夢。自分の叫び声で目覚めて、夢だったことにほっとするの。・・・だけど、どうして自分がこんなところにいるのか気づいて、また泣いて」
少女の目は炎を見据えたまま、動かない。
「何にあれほど怯えていたのかわからない。例えるなら、歩いていた道が急に消えて、気づいたら切り立った崖から深い暗闇を覗き込んでいる感じ。ただ怖くて怖くて、体の震えが止まらなかった」
膝の上で握り絞めた手が、冷たくなる。
「何日、そうしていたのか。とても長い間だったような気もするし、とても短い間だったような気もする。だけど不思議なんだよ。どんなに辛くても、永遠に続くことなんてない。・・・そのうち疲れて涙も出なくなって、草むらの中でぼんやりしてた」
ヒナタはふと、天井を見上げた。
「夏の終わりだったの。疲れて何も考えられなくなって、空を見たら・・・星がきれいで。満天の星空って、こういうのを言うんだなって思った」
彼女の目には、その光景が見えているかのようだ。
「仰向けに寝転がって空を見ていたら、本当に星が降ってきそうで。川も、滝の水しぶきも草も、きらきら優しく輝いていた。・・・何かと比べて短いとか長いとか、そんなこと言えないと思うの。人

がどれほど長生きしようと、星には敵わない。私がこの世の終わりだと立ち竦んでいても、川は変わらず流れている。自分の殻に閉じこもって、恐れて震えて生きていくのもいいけれど。・・・花が咲いたらきれいだと思いたいし、川に入れば冷たいと感じたい。夜空を見上げて天の壮大さを知るの。同じ生きるなら、そうやって歩みたい」

体の強ばりは消えていた。恐怖は消えない。けれども恐ればかりでもない、これも真実。これ以上はないという暗闇に落ち、自分の力で這い上がってきたからか、何があろうとあれほどの闇に落ちることはもうないだろう。

「だからもう、泣くのはやめたの」

修行３５日目～４２日目

修行３５日目。

ヒナタの告白から7日が過ぎていた。彼女はもう、走れない。じわりじわりと浸食されてきたのがここにきて、坂道を転げ落ちるように進んでいる。一日一日と、自由の利かない時間のほうが多くなっていた。

「シカマル！」

石の上で瞑想をしていたシカマルに、ネジが詰め寄る。予想もしていなかった少女の話は、少年たちの頭に直ぐさま浸透することはなかった。だが自由を失っていくヒナタの姿に、嫌でも全てが事実だと認めざるを得なくなっていく。

「何か、手はないのか！」

ネジの心には、今まで感じたことのない焦りが生じていた。ヒナタを失う。これがどれほどの恐怖か、考えたくもない。

「自慢のその頭で、何か思いつかないのか！」

「・・・別に自慢なんかしてねーよ」

騒ぎに他の少年たちも集まる。ヒナタはいない。彼女はもう、修行に出ることはできない。キバが無理に預けた赤丸を連れて、ゆっくりゆっくりと山を歩く、それが彼女の日課となっている。自来也は何をしているのかわからないが、この数日、夜間はもとより日中も出かけることが多くなった。

「・・・頼む。何か思いついてくれ。何かあるはずだ。ヒナタ様も知らない、何かが。頼む」

地に額を擦りつけたネジを見て、シカマルが組んでいた足をはずす。彼がヒナタを特別視しているのは知っていたが、プライドの高いネジがこのような行動をとるとは思っていなかったのだ。

「俺からも、頼む！」

ネジに続いてキバも土下座する。

「ヒナタはさ、あいつは、まだ何も知らねーんだ。本当に楽しいとかうれしいとか。・・・あいつは笑っててもも悲しそうで、寂しそうでさ。無理して笑って。でも違うだろ？笑うってさ、そういうことじゃねーだろ。廻りに気遣ってばかりで、嫌だとかそんなことも絶対に言わない。・・・なんにも知らないままで、このままで終わらせたくないんだ」

「俺からも頼むってばよ！」

「ちょ、ちょっと待て。お前ら・・・」

放っておいたらサスケにまで土下座されそうな勢いで、シカマルは慌てて止める。サスケにそんなことをさせたと知られたら、いのやサクラに殺されかねない。そんな面倒くさいことは絶対避けねばならない。それに・・・

それに、シカマルにしてもこのままヒナタを死なせるつもりなど、毛頭ないのだ。

草原を少年たちが風のように走っていたとき、少女たちが軽やかな声で笑っていたとき、新しい忍術を嬉々として覚えていたとき。白い少女はただ独り、恐れ震え、迷い哀しみ、そして全てを受け入れたのだ。全てを受け入れ身の内に鎮め、微笑んで生きてきたのだろう。

なんという強さ。自分たちより明らかに華奢で弱いと思っていた少女はしかし、誰よりも強かったのだ。

「・・・はあ・・・」

すっかり秋色になった空に浮かぶ白い雲の隙間から、一筋の光が見えた。

修行４１日目。

明日、だと告げられた。何もかも、明日、終わる。

ヒナタは昼間のうちにやるべきことをすべてやり終えた。先日、里に帰った折に、持ち物のすべてを処分してきた。忍衣などの衣類は全て燃やしてしまった。残っているものは、今着ている着物と額あて、クナイに手裏剣だ。

あと、ひとつ。

ヒナタは胸元に手をやる。

里にはまだ夏の名残があるのだろう。山は、もう秋だ。あと一月もすれば早い冬が来るのだろう。ヒナタは春も夏も秋も好きだけれど、一番好きなのは冬だった。冬に生まれたということもあるのかもしれない。別に誕生日だからといって、親に何かを祝われた記憶はない。もしかすると彼らは、娘の誕生日を覚えているのかも怪しい。それほど稀薄な親子関係しか築けなかった。

草むらに座り、星を眺めた。もう木に登ることはできない。

そんなに悪い人生でもなかったと思う。飢えたことはなかったのだし、雨露を凌ぐのには十分過ぎる家もあった。家の外では、周りの人にも恵まれていた。

本当に、恵まれていた。

ヒナタは胸元から小さなガラス玉を取り出す。これは去年の誕生日、ネジに貰ったものだ。任務で行った他国で見つけたものだと、言っていた。珍しかったのであなたに、と。彼は決して誕生日だからとは言わない。いつもそうだった。珍しかったから、きれいだったから。ついでだから気にせずどうぞ、そんな感じに贈り物をしてくれた。

とても優しい人。

中忍試験でのことをキバやナルトは責めるけれども、あれは仕方のなかったことだ。少なくとも自分たちの間では、あれで正しかった。決勝のときのような強さでこられたなら数秒と保たなかっただろう。だがそれでは意味がない。ヒナタの心情を理解し、彼は戦ってくれたのだ。そうでなければ、こんなにも落ち着いて明日を迎えられるとは思えない。

「何を見ている」

振り向くとネジが立っていた。

「星を。・・・今日は星があまりにきれいだから、月が見えないんだよ」

星も月も同じ天空にあるのに、どちらかが輝き過ぎると片方は見えない。

「・・・すごいな」

ネジの呟きに頷く。草原で見るほど開けてはいないけれど、里より空に近いからか、山で見る星は輝きが強いと思う。

ネジは隣に腰掛けると、ヒナタの髪を梳く。何度も何度も、ただ黙って。大きな手が心地よくて、ヒナタは目を閉じる。

甘やかされてるな、と思う。彼は人に優しいけれど、それは自分と同じことを他に求めないという点においてだ。こんなふうに誰かに触れることも、何かと詰まる言葉を我慢強く待ったりしない。一時は嫌われているのではと考えもしたが、それが間違いであったことに気づいた。

ネジは優しい。だが、彼が甘やかせてくれるのは自分が特別だからではないことも知っている。妹のような存在、それが定位置なのだろう。ヒナタはそう思うと、胸が少し痛むのだ。

「どうした？」

寂しそうに笑ったヒナタに気づき、ネジが問いかける。彼は僅かな変化も見逃さない。

「もう少し、時間が欲しい。・・・大人になって好きな人と結ば

れて、子供を産んで育てるの。男の子でも女の子でも、強い子でも弱い子でもいいから。あなたを愛しているよ、大切な宝物だよって伝えて、抱きしめて育てるの・・・」

白い瞳が微かに煌めく。

「・・・それは、ナルトか？」

「・・・え？」

「あなたの隣にいるのは、うずまきナルトか？」

いつからそういうことになったのか知らないが、日向ヒナタの恋の相手はうずまきナルト、と言われている。否定して廻るのもおかしな話で、ナルトには申し訳ないが自然に消えるに任せていた。

「ナルト君は、すごい人だなって思うの。ネジ兄さんやサスケ君やキバ君、シカマル君もすごいと思うけど、ナルト君のすごさってみんなと違っていて。・・・何があっても絶対に自分を信じてるでしょ？ああいうとこがすごいなあって・・・私も、あんな風になりたいって思った。ナルト君が女の子でも憧れてたと思う」

「俺も、器用に生きているわけではない」

「・・・今は、わかるよ。前なら、みんなすごいなって思ってただけだろうど。・・・今は違う。みんな修練して強くなっていったんだって、わかるよ。ネジ兄さんは特にすごいなって思う。どんなに単調なことでも、黙々と訓練してるもの。・・・生まれながらの天才なんていない。誰しも努力して、天才になるんだね」

同じ修練をしても、成長の速度には違いがある。けれどもどんなに飲み込みが早くても、努力しなければいつかは置いていかれる。反対に、どんなに遅くても努力を続けてさえいれば、いつかは花開く。

壁にあたれば壊そうと足掻く。壁が厚ければ厚いほど、懸命に努力する。そして高く厚い壁を壊した後の反動がすごいのだ。ナルトを見ていれば本当にそう思う。彼はたしかにアカデミー時代、落ちこぼれと言われていたけれど、卒業後の成長のすばらしさはどうだろう。彼は壁を乗り越えるたびに、大きく成長する。

ヒナタも壁を乗り越えたいと願った。どれだけ時間が限られていようとも、乗り越えてみたかった。

「・・・では、あなたの隣にいてもいいだろうか？」

自分の思いに入り込みそうになっていたから、何を言われたのかわからなかった。

「あなたの隣に、・・・俺が座ってもよいだろうか？」

信じられない気持ちでネジを見る。妹のような存在、そう思われていると信じていた。寂しいけれど嫌われているよりはいい。だがヒナタはその呼び方に反して、ネジを兄だと思ったことはなかった。幼い頃はともかく、いまは決してそうは思えない。だけど、伝えようとも思っていなかった。限られた時間を生きる自分が、誰かの心に何かを残してはならないと戒めていた。

「・・・もし、もし・・・生まれ変わって、また出会えたら・・・お嫁にもらって・・・くれますか？・・・」

彼らに対して隠し事がなくなったおかげで、俯くことも言葉に詰まることも少なくなったが、数日前の自分が戻ってきたようだ。俯き、消え入りそうな声しか出せない。

ネジはヒナタの顎に手をかけ、上を向かせる。華奢な体は微かに震え、輝く星に照らされた白い瞳は潤んでいるようだ。

陶磁のような頬を優しく撫でる。ここ数日の激しい訓練で、ネジの手の平はひどく荒れていた。かさついた手が彼女の肌を傷つけやしないかと恐れたが、触れずにはいられない。

愛しい、愛しい、愛しい人。

大きな手は頬から髪、背へと移動する。そのまま優しく、強く抱きしめられ、ヒナタはネジのにおいに包まれた。

「あなたを愛している。・・・あなたと、もう一度出会えるまで、待っていよう」
そんなことしたらネジ兄さん、独身のままかもしれないよ。そう言おうとしたが声にはならなかった。
遠い昔に忘れてしまった涙が溢れ出す。堪えようとしたが、だめだった。いつも涙を吸い取ってくれた星も、ぼやけてしまって見えない。見開いた大きな瞳から、ぽろぽろと涙が零れていく。ネジの大きな手が、頬を伝う涙を優しく拭ってくれるのが嬉しくて、また涙が溢れ出す。
そして、彼を困らせるとわかっていたけれど、心の底から沸き上がってきた言葉を押さえられなかった。

「・・・生きたい」

修行４２日目。
太陽はもうすぐ真上にくる。さすがに何もしなければ、暑いと感じる日はなくなっていた。

今日、終わる。何もかも、すべて終わる。

ヒナタは、昨夜ネジと星を眺めた草原にいた。夜には広いと感じたこの場所も、太陽の下でみるとさほどでもない。本当は夜のほうが良かったのだけれど、彼らの都合を考えると我が儘は言えない。
ヒナタの身を包むのは、あの時着ていた藍の着物。ガラス玉の紐を首からかけ、着物の下に入れた。この数日、とても楽しかった。人生最後の数日は、満たされていた。彼らと過ごした記憶を思い出す。彼らの会話を思い出す。自然と笑みが浮かんだ。

ああ、本当に楽しかった。

ヒナタは少年たちに振り向き、深々と頭を下げた。
「いままで、ありがとうございました。・・・迷惑をかけて、ごめんなさい」
礼を言いたい人は沢山いた。紅、シノ、いのやサクラ、アカデミー時代の教官、何もかもを押しつけてしまった妹。そしてこの大切な時間を与えてくれた、木の葉の重役たちにも礼を言いたかった。自分は独りだと思っていたけれど、そんなことは決してない。今思えば、沢山の人に助けられ、大事にしてもらった。孤独だと感じていたのは、寂しい自分に酔っていただけではないのか、そう思えるほど恵まれていたと感じる。親や家、そんなものに拘って震えていた自分の、何とちっぽけなことか。

「もう・・・いいのか？」
我ながら愚問なことを聞いている。だが、他に言えることはシカマルにはなかった。
ヒナタはゆっくりと彼らを見回して頷き、ふわりと笑った。いつもの憂いの滲む顔ではなく、すっきりとした優しい笑顔で。少年たちは胸を鷲掴みにされたような、痛みを感じた。
ヒナタはもう一度、ネジ、サスケ、シカマルを見た。キバやナルト、自来也にももう一度会いたかったが、彼らは夜が明ける前に出かけてしまった。修行なら仕方がない。ヒナタは昨夜、挨拶をしておいて良かったと思う。
空を見上げる。風のない、穏やかな秋晴れだ。

ああ、本当にいい日だ。

ネジが一歩を踏み出す。彼の手で逝けることを幸福だと思う。ネジは眉を寄せ、とても厳しい顔をしていた。血管が浮かび、白眼が発動する。チャクラを錬るとヒナタに向けて手を翳した。

彼の重荷にならないように、笑って逝こう。

微笑みを浮かべて目を閉じたヒナタの胸元一点を狙い、ネジが打つ。衝撃の後、すべてが緩やかに流れた。痛くはなかった。苦しくもなかった。緩やかに流れる景色の中に彼らが見えた。皆、思い詰めたような険しい顔をしていた。

気にしないで・・・。

そう言おうとしたが、口は開かなかった。せめて笑おうとしたけれど、それも無駄だった。視界が狭くなっていく。

最期に見たのは、青い空。慰めてくれた月も星も見えないけれど、確かに同じ、空。

こうして白い少女は、憂いに満ちた１２年の生涯を閉じたのだ。

修行35日目～42日目　2　＋　修行45日目　1

気づかせたのはネジの言葉。
『ヒナタ様も気づいていない、何か・・・』
そんなものがあるとは思えなかった。彼女とて、死にたくはなかっただろう。生きる道を求めて足掻き続けたはずだ。それでも無理だと判断せざるを得なかったのだ。

ヒナタの気づかなかった方法。自分たちが気づくこと。

もし、そんなものがあるとしたら、それは立場の違いによる見方の違いだろう。彼女は独りだった。少年たちは独りではない。勝機があるとすれば、そこだ。
シカマルはひとつの可能性を見いだす。そこからは早かった。彼は丸一日をかけ煮詰めた。表面上はぼんやりしているだけにしか見えなかっただろうが、彼の脳細胞はフルに活動していた。

「雲は、いくつだ？」
夜、忍び込むように小屋に戻ってきた自来也を捕まえた。
「・・・なんのことだ？」
とぼけた横顔を鼻で笑う。
「昼も夜も、雲を見に行ってたんだろう？・・・2つか、3つ」
「2、だ」
シカマルは、にやりと笑った。3、なら危なかった。もう一人、上忍が欲しいところだ。だが2、なら大丈夫だろう。伝説だかどうだか知らないが、自来也がその辺の上忍より腕がたつことはなんとなく予測がつく。彼なら雲忍二人、わけなく倒すだろう。
「一人はキバとナルトに足止めさせる。・・・ただし、足止めだけだ」

彼らが力をつけてきているとはいえ雲は多分上忍、倒すことは無理だろう。だが、見張りが一カ所に集まっているはずがない。片方が戦っているとき、もう一方に逃げられては元も子もない。倒すことは無理だろうが、目的を足止めにしておくのならキバやナルトには十分だ。

「サスケやネジのほうが良いのではないか？」

「いや、あいつらには他にやってもらいたいことがある」

足止めならシカマルの術が一番であるが、ナルトやキバは情に流されやすい。ヒナタに聞かせるわけにはいかない。もしネジやサスケが口を滑らせそうになったとしても、自分が側にいたほうがごまかせる。

「すべてはネジ、お前にかかっている。・・・できるか？」

次の日の朝。シカマルは少年たちに作戦を話した。成功させるもさせないも、全てはネジにかかっていた。

「もちろんだ」

彼は強く言いきる。できるとかできないとか、判断に迷うことではない。やらなければならない。それ以外に道はないのだ。

「よし」

シカマルは予想通りの返事を得、頷く。

赤天の実は宿主の死とともに枯れる。だが、ヒナタの実はもう顔を出しているのだ。赤天は随分と昔に滅んでしまったために、知られていないことも多い。だが効能は皆無で薬にも毒にもならないが、赤天と似た習性を見せるエネカという植物は、土にかえる前に宿主からその姿を現す。ならば赤天も同じではないか。ヒナタの赤天は、彼女が死んでも枯れないだろう。宿主を離れても自力で土へと向かい、生きていく。

ネジの柔拳は、ただの体術ではない。チャクラをつかい、相手の内蔵に直接損傷を与える。そして彼の白眼は確実に、相手の点穴を見る。点穴はチャクラの通り道だ。点穴をつきチャクラの流れを止

め、相手を倒す。だが、ただ一点をつけば即、死に至らしめる点穴がある。
日向に伝わるその点穴を、なぜシカマルが知っていたのかネジには不思議だった。彼の頭脳は、いくつかの情報で新たな閃きを生み出すのだろう。確かにあるその点穴だが、誰も試したことはないと言われている。理論上そうだろう、と言われているに過ぎない。なぜなら、角度も速度も強さもすべての条件が揃っていなければだめなのだ。だがどれほど腕の立つ忍であったとしても、すべての条件を揃えてただ一点をつくことは不可能だった。相手は人形ではないのだから。
しかし、ヒナタは避けないだろう。それならば、突ける。
だが問題はそこではなかった。多少ずれたとしても、死に至らしめることはできる。相手を苦しめるかどうかの違いだけだ。しかし今回はそれだけでは済まない。ヒナタを突いた後、同じ角度同じ速度、同じ強度でもう一度、突かなければならない。その点穴は、シカマルの考えでは相手を仮死状態とし、限られた時間内で同じく打てば蘇生させることが可能だという。
ネジは、シカマルを信じた。藁にも縋る思いからだけではなく、この数日をともに過ごし、シカマルが決して不確かなことを口にしないとわかっているからだ。彼が言うのなら、それがどんなに信じがたいことであろうとも、信頼するに足る。
これから3日。ネジは木を打ち続けた。失敗は許されない。試すこともできない。彼はただひたすら木に向かう。事情を知らないヒナタが心配するほど黙々と木に向かい、何百何千と打ち続けた。
そうして一発を打った。
ネジの一撃は狂いなくヒナタを打ち抜き、彼女の鼓動を止めた。許された時間はわずか数分。この間に赤天の実がヒナタから離れなければ全て無に帰す。だが生長をし終えようとしていた実は、宿主の死を感じ取るや早々にその身を離れた。着物の合わせ襟から現れた、忌々しい赤をサスケの火が焼き尽くす。それを見届けネジが、

再びヒナタを突いた。額に流れる汗を感じ、震える手を戒めて打った。
ヒナタの鼓動は、戻った。少女はもう一度、生を与えられたのだ。
全てを終え、脱力感で座り込んだネジとシカマル、辛うじて立っていたサスケのもとにナルトたちが戻ってきたのは夕闇が近くなってからだった。ナルトやキバは泥にまみれ傷ついていたが、しっかりとした足取りで駆けてきた。自来也の表情で雲が消えたことがわかる。
普段騒がしい二人の少年と一匹の犬は神妙な顔つきで、ネジに抱かれる小柄な少女を覗き込む。そうして小さな桜色の唇が微かに開き、そこから確かな息づかいを感じ取るとようやく詰めていた息を吐き出したのだ。

修行４５日目。
ヒナタが二度目の人生を歩みだしてから3日。彼女はまだ目覚めない。

「おい、本当に大丈夫なのか？」
キバは毎日、同じことをシカマルに聞く。聞かれたからといって、彼に答えるすべはない。何もかも始めてのことだ。一度死んだ人間の蘇生など、したこともなければ見たこともない。ネジも、その点穴を突いたこともなければ、突いたという話しさえ聞いたことがない。少女に何が起きているのか、いつ目覚めるのか、そんなこと誰にもわからないのだ。
少女は眠る。規則正しい寝息をたてて、ただ穏やかに眠る。
「・・・ヒナタってばさ、本当に死ぬ気だったんだなあ。なんかさ、なんか、ここんとこが痛いってばよ」

ナルトがとん、と自分の左胸を突く。
眠る少女を連れて小屋に戻って、それを見つけた。いやに小さくなった彼女の荷物。小屋の裏にあった焼け跡。ヒナタが死を前にして何をしたのかがわかった。
「なんて言うかさ、こういう時にもヒナタってば、人のこと考えるんだなあって思った・・・」
彼女が荷物を処理したのは、彼らに負担をかけないためだろう。残されたものたちの上に置かれた手紙で全てを知る。
手紙は3通あった。1通は火影に、1通は日向に、そして残りの1通は彼らに充てたものだ。火影と日向にはこれまでの経緯、すべて自分が望んだこと故誰にも咎がいかないように望む内容が簡潔に記されていた。そこには何の感情も見えない。彼女にとって日向が親の居る家族ではなく、ただの組織でしかなかったことが痛いほどわかる。
そして彼らに充てた手紙。そこには謝罪と感謝の言葉が綴られていた。会えず非礼をしてしまった者たちにも一人一人名を上げ、謝罪と感謝を記していた。そして最後に一言、幸せだった、と書かれていた。
「本当に幸せだとか思っていたんだろうか？俺は日向のことなんかわかんねーけどよ、でも普通親に充てる手紙であの内容はないと思うぜ」
「あの人は日向・・・親に何かを期待するのは止めていたのだろう。とっくの昔に、諦めていたのだと思う。短い人生だから、波風立てぬようにしていただけなのだ」
キバの言葉にネジがぽつりと応える。確かめたわけではないが、なんとなくそれが正しいような気がする。日向にどのような仕打ちを受けようとも、ヒナタは笑って受け入れた。寂しそうな笑みだった。いつもネジはそれを歯痒く思ったのだ。なぜ嫌だとはねつけないのだ、と。あなたにはそれをするだけの地位がある。だが今思えば、彼女は笑みは寂しそうであったが、仕方ないなと許容する笑み

でもあったのだ。自分の人生が短いという事実を受け入れ、同じように他の障壁も受け入れたのだ。

「・・・長いかどうかわかんねーけど、もう一度生きるんだ。今度は、ちっとは自分の為に生きるんじゃないか」

ネジは、シカマルの言うとおりになればいいと願う。呪印を受けた自分には無理だが、ヒナタには日向に縛られず生きて欲しいと思う。

早く、目を覚ませ。

修行４５日目　２　＋　修行５０日目

わんわん、わんわん。
駆けてくる赤丸に彼らは振り向いた。眠るヒナタの側に自来也を、彼がおかしな行動をしないように赤丸を見張りにつけていた。その赤丸が慌てて走ってくるということは・・・。
ひとつの考えに辿り着いたネジとキバが血相を変えて駆け出す。その後をナルトとサスケが追いかけ、最後にシカマルがキバに置いて行かれた赤丸を小脇に抱えてのんびりと歩き出す。
「ヒナタ様！！」
ばん、と音をたて外れそうな勢いで戸が開いた。そのままの勢いでネジとキバが土足で上がり込む。
「無事か！」
キバが自来也を押さえ、ネジがヒナタの方へ向かう。だが、そのネジの足が止まった。
「わしゃ、何もしとらん」
「本当か！？おい、ネジ。ヒナタは無事か？」
自来也から目を離さずキバが吠える。
「おい！ネジ！！」
返事のないネジを不審に思い振り返る。だがネジはぴくりとも動かない。
「おい、ネ・・・！」
もう一度ネジを呼ぼうとしたキバの動きも止まる。
「どうしたってばよ」
遅れてナルトとサスケが入ってきた。
「あ！！ヒナタってば、気がつい・・・！」
あまりの衝撃に言葉を失う。背後でサスケが息を呑んだのがわかった。さらに遅れて入ってきたシカマルは、その足を止める。
「な、驚くじゃろ？儂もここまでびっくりしたのは、久しぶりじ

や」
悉く固まる少年たちを自来也が笑う。
「お、驚くって・・・い、一体、何があったんだってばよ！」
騒ぐナルトを、身を起こしたヒナタが不思議そうに見つめる。
少女の月色の瞳は、漆黒の闇にかわっていた。

「・・・つまり、赤天の実はヒナタの能力を吸い取っていったんだ」
「て、白眼のことか？」
「そうだろう。もともと雲は白眼の秘密を知りたがっていた。なら、その能力に狙いを定めて術を仕掛けていたはずだ」
「つーことはさ、ヒナタは忍術も使えなくなったってことか？」
「いや、それはないだろう。白眼の術はつかえんだろうが、俺達だって白眼じゃないが、忍術はつかっているだろう。つーか、白眼でなければつかえない忍術のほうが少ない」
シカマルは面倒くさそうにナルトの疑問に答えてやった。ある程度、彼には想像つく状態だった。宿主の死を感じ自ら這い出すまでに生長した赤天の実が、能力をとっていないとは思えない。彼女の血継限界を表す白眼が消えるだろうことは、予測していた。だからヒナタが白眼でなかったとして、シカマルは他の者よりその衝撃は少なかったのだ。彼の足を止めたのは、白眼でないヒナタの容貌である。
長い睫毛に彩られた黒曜石の瞳はその大きさを際だたせ、とても印象深いものとなっていた。白い瞳のときもたしかに整った顔をしていたが、黒い瞳はヒナタをより美しく見せていた。寝起きの、どこかきょとんとした表情で彼らを見た少女の顔を思い出すたび、シカマルは今でも胸が騒ぎ出すのを感じる。
「しっかしさー、ヒナタってばかわいいってばよ。オレさ、すっげぇどきど・・・」

びしっと音がしてナルトの顔に、囲炉裏で焼かれていた栗がめり込んだ。別に弾けたわけでも、もちろん自力で飛んだわけでもない。

「これで絶世の美女は間違いないの～」

さすが上忍。迫りくる栗をものともせず楽々避けている。キバも彼らの意見に賛同したかったが、網の上で焼かれている栗は７つ。まだ十分危険な量だ。

それにしても、とひょいひょいと避ける自来也を睨みつけるネジを見た。彼は剥かれた栗の皮をつかい、焼かれている栗を寸分の狂いもなく標的に向けて飛ばしているのだ。彼の天才的なまでの能力はこんなところでも発揮されるのかと、目の前の滑稽な構図にも関わらすキバは額に汗を感じた。どうにか動く目で床に転がるナルトを見る。栗の威力は凄まじく、いまだ額を押さえて転がったままだ。とにかく我が身に火の粉が降りかからぬよう、ひたすら嵐が過ぎ去るのを待った。

修行５０日目。

長年手足を縛られていたも同じ状態だったヒナタは、自由の身になったとはいえ歩くのも困難な様子だ。里に帰すことも考えたが、彼女の目。白から黒へと変わったこの瞳のことを考えるといまはまだ、山にいるほうがいいとシカマルは判断した。少なくともヒナタが誰の手も借りず動けるようになるまでは、人目に触れさせないほうがいい。口さがないものたちに彼女が傷つけられることがないようにという、彼らなりの配慮だった。

だがしかし、いずれヒナタはその壁に立ち向かわなければならない。

「いい天気だね」

ヒナタは大きな石に腰掛け、穏やかな青空を見上げた。この修行中、雨が降ることは少なくて天気には恵まれていた。少しずつ肌寒い日も増えてきたが、まだ穏やかな日のほうが多い。足下では赤丸

が眠っていて、ヒナタはとても気分が良かった。
「まさか、また生きられるとは思ってなかった」
目覚めたとき始めに目に入ったのは、赤丸の顔だった。嬉しそうに、次に驚いた表情を浮かべて脱兎の如く駆けだした。ぼんやりした頭で何が起きたのかと考えているうちに、少年たちが次々と部屋に入ってきた。そして彼らは皆一様に驚いた表情を浮かべ、固まったのだ。不思議に思いヒナタがネジを見ると、彼は静かにクナイを差し出した。
丁寧に手入れされたクナイに映る自分の顔。そこにあったのは白ではなく、黒に変化した瞳だった。
衝撃がなかったわけではない。けれど残念だとは思わなかった。どちらかと言うとほっとした感じ、それがヒナタの正直な心だった。一生を日向に縛られたネジには申し訳ないと思うが、これで日向から離れられる、それが彼女の抱いた第一感想だった。彼女のそんな心境を読みとったのか、ネジはヒナタが自分のことを気にして悩むことがないよう、反対に気遣ってくれた。だからヒナタは素直に、良かったと思えるのだ。
「・・・本当にネジ兄さんって、どうしてあんなに感情を読みとれるんだろう？隠し事なんか絶対にできないね」
赤丸に話しかけるが、しっぽをぱたぱたと振っただけで眠ってしまった。本当に穏やかでいい天気だ。遠くで少年たちの声が聞こえる。彼らは益々強くなっていく。吸収の早い彼らを教えることがおもしろくなったのか、自来也もヒナタに構うことは少なくなり修行についている。
「・・・早く、走りたいな」
再び生を与えられたとき、すべては自由になったのだと思った。もう誰に邪魔されることもなく自由に走れるし、飛べるのだと思った。だが現実は違った。彼女の手足はいまの状態を異常だと感じているようだ。長年共に過ごした異物があることが、普通だと思っているのだろう。歩くことでさえ違和感が否めない。この場に来ると

きも、ネジに支えられようやく歩けたのだ。ヒナタ一人では小屋の中を移動するのでさえ、沢山の時間を要した。

いまの状態を不自由だとは思うが、不幸だとは思わない。ネジやキバ、ナルトはヒナタのリハビリに付き合ってくれる。彼らも疲れているだろうに、嫌な顔ひとつしない。サスケやシカマルも何かと助けてくれる。彼らに申し訳ないと思ったが、謝罪するのはもう止めた。謝罪ではなく感謝の言葉を望んでいるのがわかったからだ。皆、支え合い生きている。誰かの為に動けることを迷惑だと思うより、喜びとする。そんな人が多いのだと気づいた。

焦る気持ちはある。けれど修行はまだ３０日あるのだ。この間に人並みに動けるようになれればいいと思った。

「あ・・・そうだ。チャクラを錬るくらいなら、体を使わないし大丈夫だよね」

ヒナタは胸の前で印を結ぶ。少し風を感じた。袖が揺れる。いま着ている着物は山吹色だ。全てを燃やしてしまった彼女には着替えがなかった。着物一枚では辛かろうと自来也が買ってきてくれたものだ。明るい色の着物を着たのは記憶があやふやなくらい前のことで、自分には合わないだろうと思ったのだが、せっかく買ってきてくれたものだからと着てみた。着慣れない色で落ち着かないが、キバやナルトは褒めてくれた。ヒナタも始めは恥じらっていたが、明るい色は心まで明るくしてくれるようだ。心が軽やかになるのを感じる。

チャクラをもう少し錬ってみる。いつも感じていた壁がない。気を良くして、もう少し。空を飛んでいるような気持ちだった。とても気持ちがよい。頬に風を受けながら飛んでいる。光に向かって。

もう少し、もう少し。もっと！

ぐんぐんと光に向かって飛んでいる。速度を増して。あと少しで光に届く、そう思ったとき、赤丸の吠え声で我にかえった。

「どうしたの？」
とても心地よかった。あの浮遊感が消えたことを少しだけ残念に思いつつ、赤丸に目をやる。小さな犬は焦った様子で、ヒナタに向けて吠えていた。彼の眠りを妨げてしまったのだろうか。
「・・・赤丸くん？」
彼が何を言っているのかヒナタにはわからない。キバなら正確にその意図を読みとることができるのだ。改めてチームメイトのすごさを感じる。ヒナタが小首を傾げると、赤丸はヒナタに向け何かを言うように吠え、くるりと背を向けると外側に向けて吠えた。
赤丸と同じように、ヒナタもその視線を上げた。
「・・・え？」
あまりの衝撃に石から落ちてしまう。
「え？え？な、何があったの？」
チャクラを錬っているときは目を閉じていたから、彼女の周りで何が起きたのか全くわからなかった。
石に縋りつきながら、恐る恐る辺りを見回す。
彼女たちを中心に半径１m向こうに、幅数十センチの溝ができていた。深さを確かめたいのだがびっくりして体が固まってしまったのか、動けない。
「あ、赤丸くん。危ないよ」
赤丸が溝を覗き込む。いったいどれだけの深さがあるのだろう。そしていったい、何が起きたのだろう。
助けを呼ぼうと口を開きかけたヒナタの体を影が覆う。見上げるといつの間に来たのか、ネジが立っていた。彼は黙ってヒナタを抱き抱えると、軽々と飛んだ。
「大丈夫か？ヒナタ。」
「う、うん」
同じように赤丸を救出したキバが聞いてくる。
「何があったの？」
ネジに抱えられたままだったのだが、それにも気づかずヒナタは

尋ねた。
「お前・・・わかってないのか？」
キバが不思議そうな顔をしたが、ヒナタには何のことかわからない。
「ヒナタってば、すげーってばよ！」
ナルトが目をきらきらさせながら叫んだ。シカマルやサスケ、自来也も集まってくる。
「な、何が？」
「本当に何もわかっていないようだな。あれは、あなたがしたことだ。」
「・・・え？」
「チャクラを錬っただろう？」
「・・・うん？」
ネジの言わんとするところがわからない。
「大きなチャクラは技が発動していなくても、錬っただけでそれなりの威力がある。ヒナタは錬っただけで土を砕いたのだ。すごいのう」
「え？・・・まさか」
自来也の言葉も信じられない。まさか、自分が。だけどあの今までにない感触。障害を感じずチャクラを錬ったのは始めてだ。何とも言えない心地。だが、まさか・・・。
「儂は始めて会ったときからお主のチャクラの大きさがわかっておった。なぜそれを生かさないのか不思議だったのじゃが・・・赤天のせいだったのだな」
ネジを見ながらふん、と声が聞こえそうな笑みを浮かべた。
「だーから、言ったじゃろう？日向は目に頼り過ぎると。心で感じれば、すぐにわかったことじゃ」
ネジは悔しそうに眉を寄せたが、ヒナタを見下ろすと優しく笑いひとつ頷いた。
信じられない気持ちだったが、シカマルやサスケも微かに笑って

いるのを見て、ヒナタはそれが本当なんだと思った。嬉しくもあったが戸惑いもある。みんなの注目を集めてしまったのがなんだか恥ずかしくて、困ってネジを見上げた。

・・・？

なぜ、こんなに近いのだろう。呆けた頭で必死に状況を整理する。そうなのだ、未だ抱き抱えられたままだったのだ。

「ご、ごめんなさい！重いでしょう、降ろして」

焦って降りようとするヒナタの体を、ネジが一層強く抱く。

「あなたはオレを馬鹿にしているのか？あなたの一人や二人、重いわけがないだろう」

赤天の実がなくなってから、少女の体はより華奢になってしまった。

「そうだってばよ。ヒナタはもっと食わなきゃだめだって」

ナルトの意見にキバとサスケも頷くが、彼らを基準に言われても到底無理だ。食べ盛り、ということもあるのだろうか、ヒナタには信じられないくらい、食べるのだ。案外食べなさそうだと思っていたシカマルやネジでさえ、静かにすごい量を食べている。

「で、でも、ここに来てから沢山食べるようになったんだよ」

「あれでか？いのはもっと食うぞ」

シカマルの性格で、他人の食事量を気にするのは珍しい。何も言わないけれど、彼なりに気になっていたのだろうか。

「うん。・・・誰かと食べると楽しいね」

にこりと笑う。翳りは少なくなっていたが、日向のことを話すときは少女に憂いがさす。ヒナタが生家でどのような扱いを受けていたのか、嫌でも思い知らされるのだ。

そして少年たちは案ずる。ヒナタが山を下りて里に帰ったとき、彼女を取り巻く環境がどのように変化するのか。白眼の一族として、

それを束ねる宗家姫として、白眼をなくした娘を日向がどうするのか。彼女は多くを語らないけれど、冷遇されていたことはわかる。白眼であったときでさえそうなら、いまの彼女では。

華奢な肩に背負わされた荷物を取り除いた気持ちでいたけれど、新たな荷物を背負わせただけにすぎなかった。

忍の道を選んだ自分たちが歩む道が、平坦なものであるはずがない。だが、ヒナタの歩む道のなんと険しいことか・・・。

修行７２日目～修行９０日目

修行７２日目。

この山で過ごす時間も、残り少なくなってきた。いつかは終わるのだから、そう言い聞かせてみてもやはり寂しい。始まりの心苦しさを思い出すと笑ってしまう。歩き始めるときには道中のことを考えて、あれこれと心配してしまうが、実際に歩き始めると案外どうにかなってしまうものなのだということも、この修行でならったような気がする。体術や忍術が強くなったとは全く思えないが、心だけは少し強くなれたと思うのだ。生まれ変わったからだろうか、過去の色々なことがいまなら吹っ切れる。

「仙人様」

里で酒でも飲んできたのか、ご機嫌な自来也が山を歩いてきた。

「おお、ヒナタか。んー、どうした？」

「お話があるのですが・・・よろしいですか？」

「構わん、構わん。おなごの話を聞かないわけが、なかろう？」

この人はいつも上機嫌だな、と思う。だけど決して甘い人でも弱い人でもない。何を言っても受け入れてくれるというわけではないのだ。呆れさせてしまうかもしれない。もしかしたら怒り出すかもしれない。だけど、新たな道を歩きたいのだ。

「仙人様は、五代目火影と親しいのですよね。・・・そして伝説の上忍だとお聞きしました」

自来也に勧められた木に、並んで腰掛ける。さすがに夜は寒い。こんなに寒い夜でも少年たちは修行に出てしまった。彼らはどんどん強くなっていく。寸分を惜しむように自らを鍛えようとする。夜、小屋に残っているのはシカマルだけだった。だが、彼は休んでいるわけではない。碁盤に向かい、彼なりに修行を行っているのだ。

「まあな。儂は強いぞ～」

赤天の実について告白しようとしたときと同種の緊張感が、ヒナ

タを包んでいるようだ。彼女の言わんとしているところはわからないが、滅多に他人を頼らない少女が自分を頼ってくれている。この状況は自来也に優越感を湧かせた。

「・・・日向を、押さえることは・・・できますか？」

冬の澄んだ空気の中。雲が動き、冴えた夜空に満月が現れる。煌々とした月光は容易く地上に届き、少女の精巧に作られた人形のような横顔を照らした。黒曜石の瞳が光に反射して煌めき、その中に浮かぶ意志の強さが、彼女が自己を持った人間であることを教えていた。

修行９０日目。

今日で山での暮らしも終わる。成果を確かめるように朝から組み手を行い、昼には小屋を後にした。夕方には里に着く。キバとナルトはひたすら話し続け、時々振られる会話にヒナタは笑って頷く。気遣ってくれているのがわかる。申し訳ないような、でもこそばゆい感じで、そう、嬉しい。彼らのおかげで体も十分に動くようになった。小屋を後にするとき、「ありがとう」と言ったら「たいしたことはない」と照れたように笑われた。

ああ、ほんと楽しかったな。

山では雪が降ることも多くなっていた。あと数日で、ヒナタの誕生日だ。まさか無事に迎えられるとは思っていなかった。新たに与えられた生に、本当に感謝してもしきれない。彼らに与えられた命を大事に生きたい。任務で他人の命を奪うこともあるだろう。自ら命を絶たねばならないときも出てくるかもしれない。だが少なくとも、平時は大切に生きたいのだ。誰かに侵されることなく、自らの生を、自らの尊厳を保ちたい。

清々しい冬の空気のなか、ヒナタはそう誓ったのだ。

漸く里が見えてきた。任務終了の報告にシカマルは赴かねばなら

ないが、他の者はここで解散する。
長くて短かった共同生活が終わったのだ。
「なーんでオレが報告に行かなきゃいけねぇんだよ。ったく、めんどくせーな」
「仕方ねぇだろ。一応シカマルがリーダーだったんだから」
「同じ下忍で、リーダーも何もねぇと思うがな」
盛大に溜息を吐く姿は、本当に嫌そうだ。あの面倒くさがりがなければ火影になれそうなのに、そうヒナタは思うのだがネジに言わせると、あれは参謀向き、ということらしい。肝心なところでは手を抜かないし、思い切りもいい。だけど表に出るより、裏で暗躍を好む性格、とみているのだ。そう言われれば確かにそうなのだと思う。ネジは静かに黙って観察し、的を外さない。
「ま、がんばれよ。んじゃヒナタ、帰ろうぜ」
いつものようにキバが誘う。スリーマンセルで動いていたときにも、家の方向が同じキバとは一緒に帰った。ヒナタの家は、日向の屋敷が建ち並ぶ一角の中心にある。周りは分家が囲んでいるのだからネジも同じ方向なのだ。キバは必然的にネジが引っ付いてくるのが嫌だったのだが、堪える。ここで揉めたらヒナタが遠慮して別々に帰宅することになりそうだし、ネジには睨み殺されそうだ。
「あ、あの・・・私、ここで別れるね」
小さな少女の声は、立ち去ろうとしたシカマルの足を止めた。ヒナタの声に別の何かが含まれていた。
「・・・家に、帰るんだろう？」
恐る恐るキバが確かめる。シカマルやネジとは別の次元で、彼はカンが働く。
ヒナタが首を横に振った。微笑みに憂いはなく、黒い瞳に迷いはなかった。
「里を出ることにしたの。あ、でも抜け忍じゃないよ。里に許可は貰ったから」
「え？な、なんで！」

問おうとしたキバを押さえてナルトが叫ぶ。
「前につかっていた忍術は日向の技だから、いまの私にはつかえないの。だけど下忍なら任務につかなきゃいけない。そうしたら、今まで以上にキバ君やシノ君に迷惑がかかるでしょ？今の私はアカデミーにいる子たちよりも弱いから・・・」
「そ、そんなの、関係・・・」
関係ない、と続けようとしたキバをサスケが止める。
「・・・それに、この目では日向に帰れない。向こうも受け入れたくはないと思うの。だから、仙人様にお願いして、ついていくことに決めたの」
二人の間で、すでに決まっている話のようだ。自来也はただ黙って聞いている。
「・・・帰って、来るんだろうな？」
ネジの確かめにヒナタは頷く。
「うん。強くなれたら。・・・私が、私を守れるくらい強くなれたら、必ず戻ってくるよ」
彼女が自分を守りたいのは他国の忍からではなく、日向から、なのだろう。かつてないほどの強い意志。ヒナタが日向を離れるだろうと、ネジは薄々感じていた。日向を離れるということは里を離れるということも意味する。彼女が言い出したことに驚きは感じない。自分が側で守ってやれないことに、自来也と共に行くということに、歯痒さを感じるが不安はない。山での暮らしで自来也に対する当初の認識を改めている。彼は女好きだが、無体なことはしない。
「そうか・・・」
ヒナタが帰ってくると言ったのなら、本当に帰ってくるのだろう。彼女は一度たりとも約束を違えたことはない。
「そうか、ってネジ！お前、平気なのかよ。ヒナタをこのまま行かせていいのか！？」
「ヒナタ様が決めたことだ。口出しするようなことじゃない」
肩を掴むキバの腕を片手で払う。

「それに、日向にも伝えているのだろう？」
「うん」
体面ばかりを気にするあの一族が、了承したというのは不思議だった。だが訳知り顔で頷く自来也を見ていれば、彼が策を弄したのがわかる。
傷つけるなよ、とネジは自来也を睨みつける。彼はそんなことはしないと思っているが、いまいち確信が持ちきれていない。もしかすると、とんでもない勘違いをしているのではないか、そうもう一人のネジが問いかけるのだ。
「だが、必ず戻って来い。・・・それに、もう一つの約束も忘れるな」
もう一つの約束・・・？思い当たる節がない。ヒナタは小首を傾げた。
「あなたは、生まれ変わったのだから、な」
そう言って、にやりとネジが笑った。

『もし、生まれ変わってまた出会えたら、お嫁にもらってくれますか？』

忘れていた涙に出会った、あの夜の会話を思い出す。途端、ヒナタの頬に朱がさした。
「え、え・・・で、でも。あれは・・・」
「約束は、約束だ。・・・それとも、嫌か？」
ネジの眉が寄る。強い人だけれど、強硬な人ではないということを今は知っている。ネジの強い光が眩しくて俯いたり逃げたりしていたけれど、少しだけ自分に自信の持てた今だから、きちんと答えることができる。
「いえ。・・・ネジ兄さんがいいのなら、よろしくお願いします」
ぺこりと頭を下げたヒナタと、かつて見たことがないくらいの安堵の笑みを浮かべるネジ。それだけで二人の間で何があったのか、

シカマルとサスケは感じ取った。
「・・・この年で、もう決めたのか」
「まあ、福は残りものだけとは限らないからな。早い者勝ち、とも言うし」
どれだけの女に追いかけられようと、一切相手にしないサスケの言葉とも思えない。だがサスケにここまで言わせるヒナタの容貌、そして内面。
この3ヶ月、彼らは共に生活し、共に苦しみ、共に戦った。お互いの認識を改め、連帯感が生まれた。ヒナタに対する考えも変わった。彼女の言動や態度も個性だと思えるようになった。二度目の生を歩みだしてからの変化は好ましく感じる。
木の葉の重役がどんな思惑で修行を思いついたかは知らないが、ここまで考えていたのだとしたら、とんだ食わせ物だ。

どうせ報告に行くのなら、ついでだ。発案者の顔を拝んでこよう。

「じゃあな。ま、気ぃつけろよ」
シカマルは後ろ手に片手を上げて振ると、里に向けて歩き出す。発案者が彼もよく知る、桜色の髪をした少女だということも知らずに。
「またな」
何で、何でと騒いでいたナルトを押さえ、サスケが言う。誰も、さよならとは言わない。別れではないのだから。
「うん。またね。・・・ありがとう」
ヒナタはそう言って頭を下げ、自来也と共に里外へと通じる道を歩き出す。残った4人の少年たちは立ち去りがたく、彼女の背を見ていた。大柄な自来也の横に並ぶと一層小さく見える。大丈夫なのか、そういう不安がどうしても拭い切れない。
ふいに、ヒナタが足を止め振り向いた。少年たちを見て驚いたよ

うな表情を浮かべ、笑った。
橙に彩られた景色の中、夕日を背に受け少女が笑う。ゆっくりと咲き綻ぶ華のように。鮮やかに笑って手を振った。そしてもう一つ頭を下げてから、踵を返した。今度は振り向かない。まっすぐ、道を進む。

「いい笑顔だな」
キバが妙に納得したように言った。少年たちは顔を見合わせて笑うと、それぞれの家路に向かって歩き出したのだ。

ある日の風景　ーシカマル独白ー

でかい、よなあ？
薄着のいのや、サクラがまな板なのはわかっていたが。まさか同期で一番地味なやつが、一番でかいとは思わなかった。
あの、だぼだぼ服に騙されてたぜ。

ぼんやり能天気、天然娘が、バスタオルとはいえ、身につけてきたのは上出来だ。
だがその格好で走り込んでくるんじゃねーよ。
見てみ？キバにナルト。あいつら、出血多量で死ぬぜ？
・・・どーでもいいが、犬。お前まで、血ィー噴いてんじゃねーよ。

んでもまあ、慌ててた割に、しっかりちゃっかり相手選んでるよなあ。
ありゃもう、すり込みか？
キバもナルトもサスケも素通りで、ちゃーんとネジんとこに行くんだからな。

だけどさ、やめてやれよ。
その格好で、しがみつくのは。
ネジにーさん、失神寸前だぜ？

そりゃさ、8班のせんせー。紅つったか。あれに比べたら、まだまだだろうけどさ。で
も結構なもんだぜ？
なんつーか、反則だ。
やーらかいんだろうなあ。

いいよなあ。

・・・って、そうじゃねーだろ、オレ！

ナルトのエロ仙人発言から、この状態はわかりきってたはずだぜ。だがな？誰が、思うよ？

今日の、今日だぜ？

おかしいと、思うべきだった。

里で風呂三昧やってた奴が、こんな山奥に来て。メシより茶より、風呂か？

しかも沸かせって言った本人より先に、ヒナタに入れって言ったときに怪しむべきだった。

レディーファーストだの何だの言われて、引いちまったのが拙かった。

気遣いが足んねかったとか、さ。色々、思ったわけよ。

いっつもオレらが先に入ってたもんな。ほっといたらあいつ、後ろに後ろに下がってるし。さすがに疲れて、自分のことで手一杯になってた。もっと自己主張するやつだったら、そりゃそうだ、女が先だよな、て気付くが、ヒナタはだまーって笑ってるから、ついつい甘えてた。

・・・汚かった、だろうな。

なんにも、言わねえけどさ。

ま、とにかく、そういう負い目があった。あの『エロ』仙人は、それに気付いていたんだろうか？

そうすると、油断ならねー奴だよな。

「貴様！何のつもりだ！！」
お、ネジにーさん復活。
「何って。・・・えーと、そうじゃ！修行じゃ！」
・・・何言ってんだ？このおっさん。
「よいか、ヒナタ。忍たるもの、いついかなるときにも冷静でなきゃ、ならん」
う・な・づ・く・な。
「さするにだ。お主は儂を見て、悲鳴を上げただろう？おまけに、ほら、そのような格好で走り去った」
そりゃ悲鳴ぐらい上げんだろ。風呂場の窓から、男が覗いてたら。しかも、盛大に鼻の下を伸ばして。
「じゃがな、どのようなときであろうとも、どんな格好であろうとも、忍は戦わなければならん。くの一もむろん、同じじゃ」
・・・おい。
正論に聞こえるから、恐ろしいぜ。いや、正論だけどさ。下心がなけりゃーな。
「・・・はい！そ、そうですね。すみません・・・私、本当に修行が足りないです」
良心、痛まねーか？
「騒いじゃって、ごめんなさい。・・・ネジ兄さんもごめんね。濡れちゃったね」
その格好で頭下げんなって。危ない。後ろからエロおやじが、覗き込んでるぞ。
それにな、上目遣いで見んなよ。お前にその気がないのは、わかる。ネジに詫びてるんだろ？でもさ、んなでっかい目で覗き込まれてみ？ネジが怒んじゃねーかって、怯えた感じでさ。
そういうのは、あぶねーんだぞ？
なんつーか、男心ってやつを揺さぶっちまうんだよなあ。
ま、辛うじて頷くネジは、さすがだと思う。

一応、平静を保ってたしさ。
さすが、日向一族。感嘆するね。

それに、心配性のヒナタを安心させることに関しては、年季が違うよな。案の定、にっこり笑って風呂場に戻っていったんだから。

だけどさー、この場をどーすりゃいいんだ？
絶対に、このまんまじゃ済まねーぞ？
ヒナタが消えたら、一気に温度が下がったな。ネジも何事もなく収める気は・・・なさそうだ。
ま、そりゃそうだよなあ。わかるぜ？

まさかあのおやじが、本気で相手にするとは思えないが、少なくともネジに引く気は、ない。
つーことはさ、残った奴が止めるべきだろ？

・・・めんどくせーな。
キバやナルトがいりゃ、適当につっついて、止めさせるんだが、撃沈したままだし。
サスケは・・・。

こっち側にいるみてーだが、血ー噴いてねえって程度だな。ありゃ。あいつが赤面してんのも、見物だよな。あんだけ女に言い寄られてたら、免疫ありそうな気もするが。
いや、オレらの年で免疫あるのも怖いか。

どっちにしろ、サスケはつかいものにならねー。
つーことは・・・やっぱ、オレか？
ったく、めんどくせーな。
んでもほっといたら、死人が出るかもしんねーし。そうなると、

余計めんどーだ。

しかしオレ1人であいつら、つーか、ネジを止められるのか？
影まねつかうっきゃねーんだけどさ、疲れてんだよ。今日はキバ相手にしてたからさ。あいつ、しつけーし。こんなことなら、ヒナタ相手にやってたほうがよかったぜ。

やり始める前に、止めなきゃな。オレじゃ、ネジの動きは捕まえられねーし。いまなら、意識が全部、エロおやじに向かってるし。
・・・ほんっと、めんどくせーぜ。

しかし、あの姫さん。どーにかしなきゃ、今後も続くよなー。
自分の価値がすんげー低いところにあるみたいだから、言っても わからねえだろうな。
つーことはやっぱ、オレらでどーにかするしかねーよな。キバは役に立たねえだろうし、ナルトじゃ手玉に取られて終わりだ。
この件に関しちゃ、ネジにーさんは、論外だろ。
サスケ・・・鍛えるか。

ったく、ほんと、めんどくせーぜ。
でも・・・。

でも、さ。

・・・でかかった、よなあ・・・。

お正月

静かだ。

正月というものには、妙な静けさがある。里中に行けば初詣客などで賑やかなのだろうが、その声もここまでは届いてこない。日向敷地内はいつでも静かで重苦しいのだが、正月は特にそう感じる。ネジはこの中で生まれ育ったが、慌て走り行く人を見たことがなかった。時々すれ違う者がいても、挨拶以外に交わす言葉もなく、時には黙礼だけで済ませてしまう、それが日向一族というものだった。

ネジは宗家へと続く道を進む。少し傾斜がつき、上り坂となっている。道場は宗家寄りに建っていたが、ネジが宗本家へ行くことは少ない。もちろん行きたいと思えるような場所でもない。

あの時は、とてつもなく巨大な門だと感じたが・・・。

大木を惜しみなくつかわれた門を見上げる。幼いネジはその大きさに戦いた。息子の様子に気づいた父が、険しい眉をそっと緩め安心させてくれたことを思い出す。今ではこの門は、ただの虚構にしか見えない。中身のない一族の、虚空の象徴のようだ。

普段はしっかりと閉じられた門も、今日ばかりは開け放たれている。大きく口を開いた門を潜り宗本家へ向かう。門から家までが、また長い。緩やかに曲線を描く石畳を進み、上質の木材で作られた玄関戸の前に立つ。

「日向ネジです」

控えていた女中に名乗る。分家の中でも特に宗家と繋がりが深く、また日向始まって以来の天才だと言われていたネジの顔を知らぬ者など、ここにはいない。だが、これも通例の一つである。

女中は客間にネジを通すと部屋を出ていく。この間、会話は全くない。

日向宗家宗主に年始の挨拶に来る者は多い。日向分家は、全ての家から当主が挨拶に来なければならないしきたりになっている。幼くして父を亡くし、次いで母を亡くしたネジは若い当主として毎年、挨拶に赴いている。当主といっても両親を亡くしてからは、ネジの家に住む者は彼以外にいない。分家のひとつから嫁いだ母は、家事一切の全てを自分でこなしていたので両親が在世していたときから、彼の家には家族しかいなかった。今となっては分家とはいえ、決して小さくもない家にネジ一人が住んでいた。ただ一人の家の当主。この滑稽なまでに慇懃なものが他にあろうか。毎年この時期が来るたびに、皮肉な笑みが顔に浮かぶのを押さえることができなかった。

「どうぞ、こちらへ」

先程とは別の女中がネジを呼ぶ。いつものことだが、一体何人の者を雇っているのかと思う。この壮大な家の毎日の掃除だけで、数十人が必要なのだろう。何部屋あるのかネジには想像もつかないが、膨大な数だということはわかる。その証拠に、年始の挨拶に訪れる者は分家以外にも沢山いるが、その客が宗主に会うまでの待機場所、客間にしても客同士が鉢合わせないように一人にひとつ、用意されていた。客間だけで何十・・・。正確な部屋数など言える者がいるのだろうか。

「あけまして、おめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします」

亡き母に教えられたとおりの挨拶を行う。頭を床に着くように下げ、姿勢は崩さず。宗主から声をかけられるまでは答えず、許されるまでは頭を上げない。

「ネジか。久しいな。顔を見せてくれ」

許しが出た。顔を上げる。

数メートル先に宗主。隣にハナビ。昨年までは宗主のもう片方隣に、もう一人の宗家姫がいた。めでたい柄だが抑えた色合いの、地味な着物を着た少女。俯き加減で身動きひとつせず、まるで置物のように座していた。華やかな着物で晴れやかな表情で、凛と顔を上

げ座るハナビとは対局にいた彼女。

今頃、どうしているのだろう。一体どこでどのように、正月を迎えたのだろうか。

小さな少女が里を出てから、まだ一月と経っていない。だが彼女のいない侘びしさを、嫌というほど感じていた。どこかで泣いてなどいないだろうか。困っていないだろうか。俯いて、寂しさに震えてはいないだろうか。ネジは考え出すと胸が締め付けられるようで、夜も眠れない。何も考えず泥睡するため、修行を増やした。

「変わりはないか？」

「はい」

父のことで誤解が解けた頃より、宗主に対する思いも変わった。それと同じようにヒアシがネジに向ける言葉も変わった。宗主というより叔父が甥を気遣う、言葉のなかにそんな心が伺えるときがある。

「また腕を上げたようだな。お前の成長をヒザシは頼もしく思っているだろうな。・・・私もだが」

今まで決して上らなかった父の名も、出てくるようになった。

「悪いが、いま少し話したいことがある。予定がなければ待っていてくれぬか？」

「はい」

宗主が分家の者に対して、都合を聞くことなどあり得ない。ネジは不思議に思いながら了承した。宗主の隣ではハナビが、驚いた表情を浮かべていた。

「済まぬな」

日はすっかり暮れてしまった。多くの客人の相手をし、さすがにヒアシも疲れているようだ。日中に面会した部屋とは別の、離れに通された。離れとはいっても風呂など、生活するための間取りが一

通り揃っている。部屋は一室。

滞在客の為の部屋か。

飾り棚と小さな机が一つあるだけの、簡素な部屋だった。母屋からは渡り廊下もなく、飛び石が数十横たわっている。滞在客に対する気遣いか、部屋の丸窓から母屋は見えないようになっていた。

「この部屋をどう思う？」

「いい部屋ですね。落ち着きます」

「・・・そうか」

ヒアシは酒を一口飲んだ。飲まぬネジに注がせることはなく、自分で干した杯を満たす。

「ここはヒナタの部屋だ」

ネジは驚いて、改めて部屋を見渡した。宗家第一子の私室とは到底思えない。母屋と比べれば質素なほどだ。丁寧に作られているが、趣が凝らされたというわけでもない。

そう言えば、あの山の中。ヒナタは離れで暮らしていたと言っていた。こんな寂しい部屋で、何年も一人で時間を過ごしたのか・・・。

彼女は気軽に、家族の暮らす家を見ることさえ許されていなかったのだ。

「朝は6時、昼は12時、夜は6時。・・・何の時間か、わかるか？」

もうひとつ、飲み干してヒアシが言う。

「いいえ」

「ヒナタの食事の時間だそうだ。あれがいなくなって、ふとこの部屋の前を通ったら、戸の前におかしなものが置いてあった。見てみると膳でな、女中を呼んで問い質したら、ヒナタの食事だと言う。ヒナタはいないと言えば、それが決まりですから、と言ったのだ」

もうひとつ、干す。ネジは、宗主が酒を飲んでいるのを見たのは

これが始めてではない。一族の集まりの席で、酒は付きものだ。だが今日は、いつにも増して早い気がする。
「何の決まりかと思うだろう？使用人の間での決まりだったらしい。いつから決まっているのか、明確に答えられる者はおらぬが、そういう決まりなのだ、と。朝は６時、昼は１２時、夜は６時。この時刻にヒナタの部屋の前に膳を置く。１時間後に下げる。・・・食事が摂られていようといまいと関係なく、下げる」
ネジは愕然とした。膝の上の手が怒りで震える。
「ヒナタは任務に出ているわけではない、食事の用意は必要ない。それで今はこの『決まり』はないのだがな」
ヒアシは自嘲の笑みを浮かべた。
「ヒナタの食事は私たちが摂っているものとは違って、使用人と変わらぬものだった。あまり食さないので量も段々と少なくなっていたようだ。一汁二菜、小さな器に入っておった」
自分たちに比べ、ヒナタの食の細さに皆驚いた。どうにか一口でも多く食べさせようと、ネジは食事当番として人知れず苦心したのだ。
「この部屋に入ってみるとこのようにな、何もないのだ。あれが全部始末したのだろう。着物の一枚、巻物のひとつも残っておらん。・・・と言っても、もともと何があったのか、私には到底わからぬがな」
またひとつ杯を干した。銚子が空になったようで、ヒアシは手を打つと入ってきた女中に追加を言い渡す。
「自来也殿が来られて、ヒナタを連れて行くと言ったとき、私は深く考えもせず了解した。白眼もなくなったと言うのでな、この際だから日向から席を抜いても構わぬかと思った。宗家では今もその考えがある」
それはネジも知っていた。もともと出来損ないの姫の処遇に関しては、宗家でも分家でも密やかに囁かれていたことだ。白眼がある以上、外に出すわけにはいかない。もし出すのなら分家のように呪

印を受けさせるべきだ。それが嫌なら倉にでも閉じこめておくか。あれが日向宗家だと言われれるのは恥だ。そういう考えが日向には根強くある。

ハナビの存在もまた、ヒナタを微妙にさせた。もしハナビがおらず、一子としていたならば嫌でも宗家を継ぐ者としての待遇を受けていただろう。だがハナビが生まれた。姉に比べ優秀な妹。次期宗主はハナビに、そういう声も少なくない。だが父の代、ヒアシ、ヒザシのときのように第一子が継ぐべき、そういう声もあった。もしハナビに継がせるのなら、秀でていたヒザシを退け宗主になったヒアシ自身の立場が危うくなるのではないか。

もちろんこういった連中も、ヒナタのことを考えて口を開いているわけではない。慣例を重んじているだけの者もいたが、ハナビを擁護する者に対する対抗心でヒナタを推している者もいた。ハナビの優秀さ、ヒナタの愚鈍さ。日向一族のお家騒動は既に始まっていたのだ。

騒動で一族の力が削がれることを恐れた者たちは、躍起になって鎮めようとした。そしてヒナタの出奔である。渡りに船とはこのことで、ハナビ擁護説の者、静観者、多くの一族が諸手を上げて彼女が日向を去ることを歓迎した。

ネジは一族の腐った大人たちを忌々しい思いで見ていた。だが彼女自身が望んだことである。ネジも、ヒナタが日向を離れ自由に飛び立つことを何よりも望んでいた。少女がその翼を悠々と広げたこと、それを日向という檻が阻まなかったことは喜ばしい。しかし、だがしかし、それとは別の次元で彼女の存在が消えることを喜ぶ者たちに対して、言いようのしれない怒りを感じるのだ。

誰もが望んだ彼女の出奔。だが、宗主であるヒアシはそれを許さなかった。いや、ヒナタが自来也と共に行くことは許したのだが、日向から席を抜くことを許さなかったのだ。

それは一族の者にとっても、ネジにしても理解し難いことである。ヒアシは、ヒナタを要らぬ者として公言したこともあるのだ。

それが、なぜ・・・？
「なぜ、お許しにならなかったのですか？」
宗主に問いかけてはいけない。母の教えを忘れた。
「さあな・・・この部屋を見たからかもしれん」
蝋燭で照らされた薄明かりの部屋を見渡す。
「何もない。何かを買い与えた覚えはないからな、あれがいたときから対して変わっておらんだろう。・・・この部屋で何を考え、暮らしていたのだろうか・・・」
女中が入ってきて、黙って銚子をふたつ置いていく。
「ヒナタは小さな赤ん坊だった。一年前に生まれたどこぞの坊主はでかくて、泣き声も大きかったというのに、ヒナタもそして母親も息も絶え絶えだった。あれの線の細さは母親譲りかもしれんな。」
どこぞの坊主・・・オレのことか。
「泣き声も小さくて、無事に育つのか心配したものだ。夜など息が止まっているのではないかと、何度も覗き込んで・・・。首がすわるのも立つのも、歩くのも言葉がでるのも、何もかもが遅かった」

確かに始めて出会った頃、一年の差があるとはいえ、いやに小さいなと思った記憶がある。いまでも彼女は小柄なままだ。同年代の少女たちと比べても、一回り小さい。
「生まれたばかりの頃は、とにかく無事に育てばそれでいいと思っていた。それが1年2年と経つうちにそれだけで済まなくなっていった。速く走れ、高く飛べ、とな。誰かと比べてヒナタの弱さが目について離れなくなった」
「忍の家に生まれたのだから、それも仕方のない要求でしょう」
「確かにな。・・・だが、日向の家で考えるから愚鈍だと思うだけで、一歩外にでて見てみるとそうではなかった。現に、ヒナタは2年でアカデミーを卒業しておる。下忍になり、1年足らずで中忍試験を受けておるし、予選とはいえ最終段階まで進んだという。日向で何か特別な訓練をしたというわけでもないだろう？・・・私は

道場の出入りを禁じていたのだからな」
　アカデミーを卒業するには通常5年、最短でも3年はかかると言われていた。一つの術に秀でていれば卒業できるというものではない。一つの術だけで危機を乗り切れるものではないからだ。多くの体術と忍術を使いこなす。それが忍に求められるものだ。卒業試験課題はひとつであっても、日々の授業のなかで総合的に評価され、卒業が認められる。故に多くの者が5年で卒業し、3年という者をネジは知らない。理論上可能、そういう数字だった。
　だがヒナタは2年で卒業したのだ。
「確かに、優秀ですね」
「そうだろう？まあどこかのガキがちょくちょく修行をつけていたようだが」
　ヒアシが笑う。宗主が笑ったとこなどネジは見たことがなかった。よくはわからないが、どうやら酔っているようだ。
　同じ白眼の使い手なのだから不思議ではないが、改めて言われると落ち着かない。ヒアシは、自分がヒナタに会いに行っていたことを知っていたのか。ネジは額にうっすらと汗をかく。
「固まるな。・・・おかげで体術忍術の基本はできていたということだ」
　ヒナタはよくできた生徒だった。飲み込みが早いとは言えないが、言われたことを生真面目にやる。基本は何でも単純動作で飽きがきやすいものだが、彼女は課題を黙々とやり続けた。次に来るときまでにここまで、と言えば必ずやり遂げていた。
　赤天の実に体の自由を奪われ始めたのは、下忍になってからだということか・・・。
「ヒナタは組み手であっても、相手を傷つけないように拳を止める。あれでは実戦に役立たないだろうと思っていたが、どうやらそうではないらしい」
「どういうことですか？」
「あれの担当上忍に聞いたことがある。下忍の任務などDランク、

Cランクだが一度、警護していた者を襲ってきた敵がいた。そのときヒナタは、躊躇なく戦ったという。もちろんスリーマンセルの仲間とともに、だが」
「・・・信じられませんね」
「私もだ。これは担当上忍の推論だが、ヒナタははっきりと区別をつけている、らしい」
「何をですか？」
「敵と味方だ。仲間など味方と判断したものにはとことん甘いが、敵と見なしたものには容赦しない。そういうところがあると」
彼女と戦ったことがないネジには想像もできない。
「もし本当にそうならな、あれは誰よりも忍に向いている」
「確かに、そうですね」
ヒアシはもう一本の銚子も空ける。
「・・・山では、どうであった？」
「どう、と言いますと？」
「ヒナタだ。何というか・・・その、あれだ」
「楽しそうでしたよ」
銚子二本を空けて三本目。さすがに酔いがまわってきたようだ。ヒアシから普段の鎧が消えていた。
「そうか、楽しそうだったか。・・・それは良かった」
何も言わないが、赤天のことは彼も知っているのだろう。それに纏わる己の弟の話も聞いたのだろう。心底ほっとしたような表情が、それを物語っていた。
「黒い目になったと聞いた。どうであった？似合っておったか？」
「はい」
ネジは大きく頷いた。肌理の整った白磁の顔に、憂いをなくした大きな黒曜石。うっすらと頬を染め、恥じらい俯いたその顔を思い出すたび、今でも胸が騒ぎ出す。
「そうか、似合っておったか。・・・見てみたいものだな」
意外な言葉にネジは顔を上げる。少し姿勢が乱れているようだ。

「きれいだっただろう？あれの母も美しい女だった」
ヒナタの母がハナビを産み三ヶ月後に亡くなったとき、ネジは６歳だった。数回しか会ったことはなかったが、その美しさは記憶に残っている。
「体は弱かったが、気は強かった。・・・ハナビは、容姿は私に似たようだが性格は母親に似たな」
ヒアシは、残り一本の銚子に手を伸ばす。
「ハナビを産んですぐ床につき、そのまま亡くなったからな。しばらくは誰もハナビに構っておれんかった。あれを育てたのはヒナタだ。もし姉上を勘当したら絶対に許さない、とハナビに釘をさされてしまった」
ヒナタは誰にも優しいが、ハナビにはとくに甘い。次期宗主は自分だとハナビは決めているようだが、それはただ宗主になりたいという考えからではなく、宗主になって姉上を守りたい、そういう思いからのようだ。表だってヒナタを庇うということはしないが、彼女は静かに記憶している。大切な姉上を傷つけた者の顔。
ハナビが宗主になれば日向に新しい風が吹くのだろう。彼女がまず取りかかりたい大仕事は、日向の古い体制を改善することなのだ。ネジはいつかくるその時には、惜しまず力を貸そうと思っていた。
「ハナビに釘をさされたからだけではないぞ。自来也殿から話しも聞いた、怒られてしまったわ。それでも親か、と。ヒナタが毎日毎日、こんなとこに一人で震えていたのかと思うと、不憫でならん」
ヒアシは目元を指で強く押した。泣いてはいなかったが、泣きたいのだろう。
「幼い頃は引っ込み思案でな。いつも私の着物を握って、私の背に隠れようとしていた。それがいまは、私から隠れている。・・・どこで、間違えたのだろうか」
最後の銚子も空になった。ネジは追加を止めた。盆に伏せられていた湯飲みを取り、渋めの茶を入れて手渡す。
外は雪が降り始めたようだ。音が消える。ヒアシはゆっくりゆっ

くりと、茶を飲む。ネジは火箸で、火鉢の炭を静かに動かした。息を吹きかけると一瞬、炭が赤くなる。幼い頃の記憶が蘇る。

雪の日。父に連れられ訪れたネジを、ヒナタは喜んで迎えてくれた。始めぱっと顔が輝き、次に恥ずかしそうに俯いたのが、かわいらしいと思った。父を待つ間、庭で遊んだ。雪をつかい小さなうさぎを作ってやると、大事そうに小さな両手の上にのせた。剥き出しの手が赤くなるのも構わずに、にこにことといつまでも雪うさぎを眺めるヒナタを部屋に入れるのに苦労したのだ。どうにか部屋に入り、用意された火鉢を二人で囲んだ。火に手を翳して暖めながら、炭に息を吹きかけて色が変わるのを楽しんだのだった。きれいだね、ヒナタはそう言って笑っていた。恥ずかしがり屋だったが、慣れていくとよく笑う子だった。

あのおかしな仙人に連れられて、いまは笑っているだろうか。

ヒアシの空になった湯飲みに、新しい茶を煎れる。一口のみ、深く息を吐き出した。ヒアシは湯飲みの茶を、ネジは火鉢の火を眺める。静かにゆっくりと時間が流れていく。ふいにヒアシが口を開き、ぽつりと漏らす。

「帰って、くるだろうか・・・」

ネジは持っていた火箸を置いた。

「帰ってきます。約束しましたから」

「そうか・・・そうか」

ヒアシは何度も頷いた。強硬に除籍を迫る一族を黙らせたのは、ひとえに娘の居場所を奪わないためであったのだろう。最後の決断はヒナタに任せるにしても、帰れる場所があるのだということをみせておきたいのだ。その一方で、ヒナタが日向や自分に愛想を尽かしてしまったのではないかと、不安だったのだ。誰かに払拭してほしいと願ったところで、宗主としての立場上、簡単に弱みをみせるわけにもいかない。ヒアシは今日のこの日を待ちわびていたのだろ

うか。日増しに亡き弟に似てくる甥と、語り合いたかったのだろう。ネジはそう思う。

もう少し時が経ち、自分も酒が飲めるようになったなら、今度は酒を酌み交わしながら話をしよう。その時は甥ではなく、義息子として話を聞きますよ。

ネジはふっと笑うと席を立った。いつの間にか眠り始めたヒアシに掛けるものを母屋に取りに行くため、部屋を出る。

雪が音もなく降っていた。刺すような寒さに背筋が伸びる。飛び石の上に立ち、冷たい空気を吸い込んだ。凛として、心地よい。

ふいに気配がして、振り向いた。起きたのか、ヒアシが戸口に立っていた。そして神妙な顔をして一言、言った。

「やらんぞ」

彼の白眼を見てネジは笑った。そうだ、ヒアシも白眼の使い手。宗家を憎みながらヒナタを訪ね来るネジの思惑など、とっくの昔に気づいていたのだろう。だが、駄目だと言われ簡単に引き下がる気など毛頭ない。そんなに単純な想いではない。

「何がおかしい」

「いいえ」

ネジは笑いを納める。どうやらヒアシは一皮剥けてしまったようだ。公式の場面では態度を崩すことはないのだろうが、彼の中でヒナタに対する感情が変わったのは確かだ。

風は穏やかに、優しく吹きはじめた。冷たい雪も、触ってみると案外暖かいものだ。

ネジはヒアシに一礼し、帰宅する旨を告げた。だがふと沸き起こった悪戯心に、歩き始めた足を止める。そうして振り返りヒアシに一言告げ、そのまま忍術をつかい、一瞬で姿を消した。

ヒアシの怒声が追いかけてきたが構わない。彼女のいない宗家を訪ねることは、しばらくないだろう。

白い雪の中、センリョウの赤い実が見えた。雪うさぎの目。ヒナタはあの雪うさぎを、庭石の上に静かに置いた。火鉢を囲み語り合い、二人が庭に出てみるとうさぎは誰かに壊されていた。ヒナタは繋いだネジの手を握り締めた。泣きはしなかったが、小さな手が震えていた。漸くネジを見上げ、仕方がないね、と笑ったのだ。

ああ、早く帰ってこい。もうここは寒いだけの家ではない。それでも嫌だと言うのなら、あなたが良いと言うのなら、共に暮らそう。うさぎなど、いくらでもつくってやれる。

背中で雪が落ちる音を聞く。夕日の中でみた、ヒナタの笑顔を思い出す。

早く帰ってこい。

庭に一人残され、ヒアシは白い息を吐き出した。庭木が撓り、雪が落ちる。

『でも、本人の了解はいただいています』

「・・・あのガキ」

ヒアシは忌々しげに呟くと、笑って白く染まった景色を見た。

ヒナタはいまどこにいるのだろう。雪のなかにいるのだろうか。寒くないだろうか。寂しくないだろうか。笑っているだろうか。・・・幸せだろうか。

庭に植えられているセンリョウの実が、白い世界に華を添える。白眼の一族に黒がいたとしても、鮮やかに映えてよいことだろう。

早く、帰ってこい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0386o/

常夜の月

2010年10月20日10時37分発行